
魔王を拾ったわけだけど

しろやまツトム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王を拾ったわけだけど

【Nコード】

N8179X

【作者名】

しろやまツトム

【あらすじ】

いやあね、俺はただ学校から早く帰って、双眼鏡を使って隣の奥さんの生着替えでも堪能しようと思ってただけなんです。そしたらね、道端に可愛いコスプレした女の子が倒れてたものだから、恩を売ってあんなことやこんなことをしてもらおうかなと思って、善意から助けたわけです。ところがコイツ、綺麗なのは外見だけで、短気な乱暴者だったんです。しかも自分を異世界の魔王だと思っているキチガイでした。あまつさえ、命の恩人である俺に世界征服の手伝いをしろと言い出しまして……。

魔王の女の子と変態男子高校生の、世界征服？のお話。

俺と君と手下

「ねえ、こんなへんぴな所より、前線にもっと兵力を集中させるべきじゃない？」

案の定、彼女はその細い指でディスプレイ上の拠点を目指し、蒼の光を宿した目で俺を見つめながら、解せないといって口調で提案してきやがった。まったく、この乱暴者……。もとい、お嬢様は戦術の「せ」の字も分かってないらしい。お前が指し示した場所の戦力を減らしてみろ、隣接する二つの都市に所属するギルドの連中にあつと言う間に陥落させられてちまうっつーの。だいたい有事でもないのに、前線に必要な以上の戦力を集中させてどうする。こっちは拠点も少ないんだから、兵力をそうやすやすと移動するわけにはいかないっての！

上記のようなことをいいとこ育ちのお嬢様でも分かるように、そして生後三年の可愛い男の子でもたやすく理解出来るよう、詳しく説明しようとしたところ、

「分かった！ 分かったって言ってるじゃない！ クドい！」

などとマジギレされた。俺は悟る。多分コイツは、俺がさっき話したことの25%も理解していないと。何故ならその行動が、男子高校生が母親に説教を食らわせられたときに取るパターンと、完璧に一致したからだ。ちなみにその男子高校生とは、誰でもない、この俺のことだ。

「お嬢様、コウジさんの言うことももつともですよ。お嬢様も一軍の総大将なんですから、部隊配置などの知識も、しっかり頭に入れ

ておかないと」

彼女の隣……おっと、ちなみにこの馬鹿女は俺の左側の椅子に我が者顔でふんぞり返っているわけであるが、さらにその隣で、まるで忍者のように膝を立てて脳筋に付き従っている、ショートヘアで目がキリツとした美少女が、脳筋にそう進言した。

「もう、レイミイまで小言言わないでよ」

腹心の部下が俺の味方をしたので、しぶしぶといった様子で彼女は引き下がった。うんうん、レイミイちゃんはしっかり分かってる。さすが、俺の将来のフィアンセ兼メイドさん兼女王様だ。胸がない？ そんなの飾りに過ぎんだよ。変態どもには分かんだらうがな。

取りあえず話がひと段落ついたので、俺はこの場で話す予定だった話を始めることにした。

「それじゃあ、今後の方針を説明するぞ。まずは東の砦を奪回して……」

そのとき、俺のPCからけたたましい警告音が鳴り響いた。

「――敵襲ですね」

レイミイが、呟くように言う。俺はPC上のマップで敵が迫っている拠点を確認する。先ほどどこかの誰かさんが言及していた砦だった。それしろ、早速狙われたじゃないか。

「レイミイ、マリージの砦の指揮官を映し出してくれ」

「分かりました」

レイミイが頷いて、そばに置いてあった丸状の鏡に、何やら呪文を唱えだした。ちなみにマリージの砦とは、敵襲を受けた砦の名前である。

レイミイが呪文を唱え終えた後、鏡に一匹のゴブリンが映し出された。その顔は恐怖でひきつっている。無理もない。この砦の兵士達は彼も含めて、新米兵士ばかりなのだから。

「ダ、ダンナ！ 助けてくだせえ！ 敵が！」

「冷静になってくれ、取りあえず状況を教えてくれないか。敵はどここの都市からやってきた？」

「メルンの町からです！」

「ということは、まっくらの洞窟は突破されてしまったということだな？」

まっくらの洞窟とは、メルンとマリージの間に存在するダンジョンである。野生のビッグオクトパスというモンスターが支配していたはずだ。地名が幼稚？ お前、ファンタジーなRPGしたことないだろ。ついでに水泳の授業が始まる前の女子更衣室に突撃したこともないだろ。俺はあるぜ。

「そ、そうなんです！ 奴らはあの化け物を倒したその足で、まっすぐこっちに向かってきていやす！」

お前も化け物の一種じゃねえか。心の中でそう呟いたが、口には出さないでおいた。優しいだろ。ふはははははは。

「そこまで確認しているということは、偵察のブラックバットはもう放っているということだな？」

「はい、ダンナの命令だったんで」

このゴブリンは度胸は足りないが、細かいことでもしつかりこなす。やはりコイツを指揮官にしておいて正解だったな。まあ、顔は近所のカラスからモテまくる俺様に及ばないがな。

「よし、じゃあ今は落ち着いて待機しておいてくれ。後で俺から命令を発信する。くれぐれも下手な行動は起こすなよ」

「へ、へえ」

「それじゃあレイミィ。偵察のバットの視界を見せてくれ」

レイミィはこくと頷くと、鏡に右手をかざす。ゴブリンの映像がおぼろげになり、鏡の中がもやもやとして、場面が切り替わりかわった。ちなみにブラックバットとは、コウモリ型のモンスターのことである。素早い動きで敵を翻弄することが出来、超音波も放つことが出来るが攻撃力も防御力も低く、戦闘には向かない。恋愛にも向かない。

広い大草原の中、四人のパーティーが砦に向かって進んでいた。三人はどうやら戦士の男で、がっちりとした体格をしている。全員が斧を持っていた。一人は小柄の女性で、白いローブをまとっている。おそらくヒーラーであろう。くそっ、うらやましい。なるほど、強行突破で突き進んできたらしい。各自の身につけているアイテムは、遠出してきたにしては少ない。ビッグオクトパスとの戦闘で消費してしまったのだろう。

「ダンジョンは突破したが、いささか余裕があるので、マリージの砦もついでに攻略してしまおう、という考えでしようか？」

レイミイの問いかけに、俺は頷いた。

「多分な。町に戻るのが面倒だと思ったんだろう」

だとすれば不幸中の幸い、敵が幾分疲労した状態で戦闘を行うことが出来る。もつとも、こちらが新兵ばかりだという条件には変わらないが。俺は素早く脳内で、今とることの出来る最善の策を考える。こちらの戦力は新米兵士のゴブリン達およそ400人に、ブラツクバット50匹。ゴブリンはモンスターの中でも下位に位置し、能力は低い。簡単に言えば雑魚キャラだ。相手は四人とはいえ百戦錬磨の旅人、マトモに戦えば勝ち目は薄い。

「……よし。レイミイ、マリージに繋いでくれ」

「さっそくだが、この前に製造させていた例のアレの数はどれくらいだ？」

「少し待ってて下せえ」

そう言つとゴブリンは近くにいた手下の元へ向かい、数量を確認する。そして、鏡の前に戻ってきた。

「ざつと、200くれえですね」

よし、それだけあれば十分だ。

「分かった。それじゃあ俺が作戦を送る。しっかり実行しろよ」

「へ、へえ！」

俺はレイミイに通信を切るよう伝えると、PCに向きなおって作戦内容をタイピングし、メールとして送信した。これで向こうには手順が書かれた紙が送られているだろう。

「ちょっと、どうするつもりなの？」

今までずっと口を閉じていた彼女は、自分が会話に入れなかったことが気分を害したらしく、不機嫌な口調で言った。

「今に分かるさ」

俺は少し、顔をにやけさせながら言った。

鏡の中の闘い

レイミイに偵察用バットの映像を映し出させると、パーティーは砦のかなり近くまで来ていた。

「よし、もうすぐマリージの砦だな」

「こんな小さな砦、ビッグオクトパスに比べたらモヤシみたいなもんだぜ」

「ああ、速攻でぶつつぶして戦利品をガツポリ頂こう」

戦士達の言葉に、俺は心の中でほくそ笑んだ。やられるのはそっちだっつーの。

「もう、皆さんもう少し警戒してくださいよ」

戦士達を諫めようとしたヒーラーだったが、何かに気づく。

「皆さん、アレを！」

ヒーラーの言葉に、戦士達は彼女が指し示す方向を見上げる。砦から、バットの群がパーティーに向かって飛んできていた。少なくとも見積もっても、30匹はいるだろう。

「へっ！　ようやく雑魚どものおでましか」

「あんな奴ら、俺一人で十分だぜ！」

「あーあ、数ばっかいてめんどくせえ。とっとと片づけてしまおうぜ」

戦士達はそう言つと、バットの群に向かって走り出し、攻撃を仕掛けようとする。

しかし。

「クソツタレ！ 逃げてばっかいないで少しは攻撃してきたらどうだ！」

バット達は戦士達の攻撃を避けて距離を取るのみで、自分達から攻撃を仕掛けようとはしない。戦士達も僧侶も飛び道具を持っていないことを良いことに、攻撃の届かない絶妙な距離を保ちながら、戦士達の前を飛び回っている。ただでさえ単純な戦士達は、怒りで正常な判断を失っていた。

「ぶっ殺してやる！」

勢い勇んで突撃し、斧を振るう。その斬撃は一匹のバットの体を、一刀両断し、絶命させた。ただでさえ防御力の低いモンスターだ。屈強な肉体を持つ戦士達の渾身の一撃をともに食らえば、ひとたまりもない。しかし、戦士達が殺した数は11匹。まだ、その約3倍のバット達が残っているのだ。戦士達もバット達との鬼ごっこに付き合わされ、少しずつ疲労が溜まっていく。ヒーラーはそんな彼

らを、文句も言わずただひたすら治癒していた。

しかしモンスターに気を取られていた彼らは気づいていなかった。自分達がいつのまにか、どんどん砦の方へと誘導されていることに。

「頃合いだな」

鏡で様子を伺っていた俺はそう呟くと、PCにただ一言だけ打ち込み、送信した。

『攻撃開始』

その攻撃は、突如としてやってきた。

「きゃあああ！」

ヒーラーの体に、いくつもの弓矢が突き刺さる。俺はちょっと良心の呵責を覚えるが、これも戦だ。許せ。

「ルーシー！　しっかりしろ！」

戦士の一人が、草原に倒れ込む彼女の所へと向かう。別の二人は、

砦の方を振り返った。

「くっ、砦内からの攻撃か」

どうやら、今まで身を潜めていたらしい。何百匹ものゴブリン達が、その手に弓矢を持ち、こちらを狙っている。

すぐさま、第二射が放たれた。戦士達は疲労もあり、鈍重な動きではあるがその攻撃を回避した。

「馬鹿な！　なんであんなに早く第二射を」

ゴブリン達は二つの班に別れ、交互に攻撃を行っている。そのため、射撃の間隔が短いのだ。数がある程度そろっているからこそ、使える戦法である。そしてコウジは彼らに、まずヒーラーの女を狙うように指示を出しておいた。彼女がやられれば戦士達をサポートするものは誰もいなくなるし、彼女を守って戦わなければならなくなるからだ。

コウジの読み通り、戦士達は集中攻撃を受けているヒーラーの壁にならざるを得なくなる。

「くっ！　これじゃ身動きがとれねえ」

ヒーラーは足に重傷を負い、回復アイテムを使う暇もないほど、弓矢の雨が降ってくる。彼らが取れる行動は、一つだった。

「これ以上は無理だ！　逃げるぞ！」

彼らが弓矢から女を庇いつつ逃げる光景を見て満足した俺は、レイミイに言った。

「もう良いぞ」

「はい」

レイミイは短くそう答えると鏡を撫でる。一瞬にしてそれは、普通の鏡となった。

「ククク。臆病と数は使いようだな」

新米のゴブリン達が勢い勇んで敵に向かっていけるわけがない。弓を与えて、安全な砦内から攻撃をさせればしっかり働けると考えたが、どうやら大正解のようだった。

そして、俺が勝利の快感に酔いしれていられたのは、ほんの数秒だった。

「ちょっと」

俺は正直、気づいていた。戦闘の光景を見ている最中、彼女の顔がどんどん険しくなっていたのを。そして今の声は、明らかに怒りを含んでいた。彼女の方におそろおそろ振り向く。その額には、青筋が浮き上がっていた。どーやらコイツのポリシーとやらが、俺の行動をお気に召さなかったらしい。ちょーヤバいです、はい。

「なあ、君。どうだい？ 賞味期限切れの生ぬるい牛乳でも」

「いらんわ！」

はい、火に油を注いってしまったようです。おかしいな。彼女の機嫌を直せる、渾身の冗談になるはずだったのに。女心は分からないが俺は諦めないぜ。なんせ、彼女のようなタイプの弱点は分かっている。

「そんな、額の青筋がピクピクうごめいているキミも、とってもキョートさ。まるで琵琶湖に浮かぶキョーピー人形のようなだよ」

その後、俺がどうなったかは分からない。ただ一つ言えることは、俺の顔面に音速を越える何かが直撃をしたってことだけだ。世界は真っ白に塗り変えられ、俺は自らの意識が薄らいでいく中でこう思った。

今当たったのが、おっ○いだったら良いな……と。

始まりの日

深い意識の奥底で、俺は夢を見ていた。彼女と出会うキツカケとなった、あの日の夢を。

大人はみんな、揃いも揃って口にする。『学生時代は良かった』と。俺から言わせればそれは幻想だ。記憶というのは美化されるもので、たいてい無意識のうちに自分自身が都合よく改変しているものだ。当時は嫌なことも沢山あったであろう俺の小学校生活も、今では学習内容の簡単さと、周りにいた口リっ子達のおかげで、戻りたい時代ナンバーワンにランクインしている。ハアハア。

そういうわけで、俺のまだ美化されていない高校生活は、いたって平凡で単調でエロの工の字もまったく見えず、ましてスカートの中身なんかはまったく見せてもらえない退屈な日々なのである。授業進度は中学に比べて格段に速くなり、宿題は山積み、美女教師は全員が既婚者というため息もつきなくなるような毎日だ。俺だけでなく、一部の壮大な野望を持っていたであろう男子生徒や、独身の男性教員にとっても。とはいっても、俺は人生に絶望しているような終末思想の持ち主でもないわけで、この何気ない毎日を、自由気

ままに過ごしていたのだった。

「きゃあ！ この変態！ なにすんのよ！」

「ちっ！ 失敗したか！」

ターゲットの女子生徒の悲鳴と、俺の悔しさあふれる声が漏れたのは、ほぼ同時だった。

『スカートの中身を見せてもらえないなら、めくっちゃえば良いじゃないか』という俺の編み出した名言と、自分自身の本能に従い、俺は前を歩いていた女子生徒のスカートをめくろうとしたのだが、周りの空気が読めない女子グループが悲鳴を上げたせいで、ターゲットが振り向いてしまった。俺の手はスカートに命中はしたものの、殺気を感じたであろうターゲットは、瞬時にスカートを手で押さえつけてしまったのだ。こやつ………出来る！

作戦が失敗した以上、これ以上ここに長居する必要もない。続々と敵の応援も到着している。ここは戦略的撤退を行うのが正しい判断だろう。そう思った俺は、バッグを片手に走り出した。俺とすれ違う男子生徒達は、俺に向かって盛大な拍手を送ってくれ、女子生徒達は尊敬の眼差しで俺を突き刺すように見る。

「くら！ 待ちなさいよ！ この変態コウジ！」

後ろから女子生徒の、愛する者を引き留めようとする声が聞こえ

る。胸は痛むが、俺には早く帰ってやらなければいけないことがある。心を鬼にして、俺は玄関へ猛ダッシュした。

俺の家の隣に、美野里さんという女性が住んでいる。『みやさんさんじゃないぞ。『みのり』さんだ。れっきとした名前だ。ちなみに既婚者である。俺の千里眼によれば、年齢は30代前半だ。おつとりとした美女で、肩の下辺りまで伸ばした黒髪が眩しい。おまけにスタイル抜群である。ちなみに夫はそこらへんの草むらから普通に出てきそうな、至って普通の眼鏡をかけたサラリーマンである。くそつ、うらやましい。

最近になって土地を買い、この町に移り住んできたのだが、彼女はただの引っ越してきた隣人という枠を越えて、毎日のように俺へ希望を運んでくれる存在となった。おいおい、その君、変な勘違いをしないでくれよ。別に俺は美野里さんの不倫相手でも対戦相手でもない。そんな関係になれば良いなあと思っているだけだ。人の幸せを奪おうなんて、ちっとも考えていないよ。

このことについて説明すれば少し長くなるのだが……え、もう長い？ 気にするな、問題はない。俺の家と美野里さんの家の家は一戸建てで、俺の部屋は二階、彼女の部屋は一階にある。そして俺の部屋は、彼女の家の周りを囲っている塀を飛び越えて、彼女

の部屋を覗くことの出来る位置に存在するわけだが、これが重要だ。

彼女の生態は驚くほどに一定している。まず、朝の8時頃に夫を玄関まで見送り、新妻の必殺技とも言ふべき『夫への、いつてらっしゃい、ちゅっ』を発動する。くそっ、うらやましい。その後、天気が良ければ洗濯物を干し、続けて掃除や他の家事を行う。11時頃には彼女は作業をいったん止めて、食事の準備をする。そしてドロドロした昼ドラを見ながら優雅な昼食をした後、日によって様々な趣味をたしなむ。お菓子作り、読書、書道、生け花、ガーデニング、盆栽、あやとり、剣玉etc・・・彼女の趣味は幅広い。この俺でさえ把握出来ない程だ。え？　なんでそんなに詳しいのかって？　そんなことは今、重要なことではない。

話を戻そう。そうして自分の時間をしつかり堪能した後、帰宅する夫のために夕飯の準備をするのだが、その前が問題のポイントだ。彼女は台所に立つ前に、一度シャワーを浴びる。どうやらそうしないと気が済まない性分らしい。だが驚くべきことに、そのとき彼女は着替えを脱衣所ではなく、自室で行うのだ。私はそれを、夫が不在という安心感と、タンスから取り出した衣類をわざわざ脱水所まで持っていく面倒さからきている行動だと分析している。しかもだ、彼女は周りが塀で囲まれているという安堵感からか、外が暗くまで自室のカーテンを閉めない！　つまり・・・、これ以上は賢い諸君なら分かるだろう。察してくれ。

そついうわけで、俺は学校と家を結ぶ歩いて30分の道のりを、猛スピードで駆け抜けているわけだ。この目に、女神の祝福を頂く

ために。

余談だが真夜中の間、彼女の自室はカーテンが閉まっているだけでなく、人の気配すらない。おそらく彼女は夫の部屋で一緒に寝ているのだろう。くそっ、うらやましい。

ファースト・コンタクト

校舎内からずっと全速力で走っていたため、息が苦しくなる。俺は左腕にはめている腕時計をチラリと見た。現在時刻は4時52分。ヤバイ、美野里さんが服を脱ぎ出すまで、残り8分しかない。もしこれを逃してしまえば、彼女の湯上がりの姿しか見ることが出来ない。自ら進んで服を脱いでいくシーンを堪能出来ないじゃないか！

俺は走るスピードを上げる。とつくの昔に俺の足は限界を越えた。元々、運動が得意な方ではない。長距離走なんてもつての他だ。それでも俺が走り続けていられるのは、美野里さんへの煮えたぎるような愛情のおかげである。

後もう少しで我が家というところで角を曲がったとき、俺は道端に普段は見慣れない物を目にして、思わず立ち止まった。美野里さんの生着替えのことも、すっかり頭から抜け落ちてしまった。

少女が倒れていた。年は俺と同じくらいだろうが、何より先に目に入っただけはその格好だった。黒を基調にして、所々に青のラインが入っており、荘厳な雰囲気漂わせていて、女性が着るにはあまりにもミスマッチな感じを抱かせる。まるで、中世のヨーロッパを

舞台とした物語に出てくる、悪い領主が着ていそうな服である。髪の毛は紫色で、おそらく染めているのだろう。地毛が紫色の人間がいるわけないし。ということは、きっとコスプレ趣味を持った少女に違いない。なんで倒れているのかは謎であるが。

まさか、見て見ぬフリをするわけにもいくまい。コップ一杯程度の善意とスプーン大さじ一杯程の好奇心から、俺は少女に近づいて顔を覗きこむ。そこで、俺は彼女が端正な顔立ちをしていることに気づいた。色白で、目を閉じている横顔は気品を漂わせている。なかなかの美少女だ。さらに、胸もなかなか膨らんでいて、抜群のプロポーションである。思わず長いこと見とれてしまっていたが、何も反応を返さない。呼吸はしているので、おそらく気を失っているのだろう。

「おい、大丈夫か」

問いかけてみるが、返事はない。さて、どうしたものか。一番てっとり早いのは携帯電話で救急車を呼ぶという、善良な市民のごく一般的な対応をすることである。しかしこの娘にとっては残念なことに、俺は善良な市民ではなかった。こんな美少女をあっさり手放すわけあるかよ。うひひひひ。

それに、こんな格好をして倒れているなんて普通じゃない。何か深い理由があったのではないか、と思う。

例えば、この子は両親の暴力から逃げるために家出した少女で、とあるサイトで知り合った男性の所へ転がり込んだのだが、実はその男には変態的趣味があり、少女にコスプレを強要したあげく、終には彼女に自分を鞭で叩くように懇願してきて、そのことに恐怖を感じて逃げ出してきたとか。あるいはこの子は反メイド組織『抹茶味の鯛焼き』の一員で、全日本メイド協会から追われる立場にあるとか。どちらにしても、安易に警察へ突き出すような真似は避けるべきだろう、と俺は考えた。幸いにもこの子は気絶してるだけのようで、目立った外傷もないし。救急車を呼んだり、警察に電話するのは、ひとまず彼女の話聞いてからでも遅くないだろう。

そこで、俺は考えた。俺の父親は会社の長期出張に行っており、一ヶ月は戻ってこない。母親は今日から高校時代の友達との温泉旅行に行っていて、帰ってくるのは二週間後。つまり最低二週間、我が家には俺以外の人間は帰らないということである。

つまり……だ。計画としてはこの娘を我が家に持ち帰り、手厚い看病を行う。そして俺に好意や恩義を感じたところで、あんなことやこんなことをふははは。名案だ、実に名案だ。俺はさっそく実行に移すことにした。

しかし、どうやって家まで運ぶのかが問題になった。個人的には背中によって、『やっべなんだか柔らかい物が背中に当たってるよヒヤッホーイ!』というようなことをしたいと思ったのだが、断念した。決して善意からではないぞ、ご近所の世間体を気にしての判断だ。かといって、アスファルトの上を引きずっていくのも気が引ける。

迷った末に、お姫様だっこをすることにした。これでも十分恥づかしいが、見ず知らずの男に『やっべなんだか柔らかい物が当たってるよヒャッホイ』されるよりはマシだろう。美少女は俺の想像よりは軽く、髪の毛からはなんだか甘美な匂いがした。幸い彼女を発見してから、ここを通行した人間は誰もいない。普段から、あまり人氣がない裏道だからだろう。ここから全速力で走れば三分い内に自宅に着く。目撃者がいなければ、何の問題もありはしない。全力疾走のせいで重くなっていた体を無理に動かし、俺は駆けだした。

最初の角を曲がったとき、見事に出くわしました。近所でも有数の、『口が軽い噂好きのおばさん』に。ええ、俺を見た次の瞬間、歯を剥き出しにして、ニヤリとされました。まるで獲物を見つけた狼のようでしたよ。俺はその横を、内心で冷や汗タラタラながらもポーカーフェイスで通り過ぎることしか出来ませんでした。明日には俺のことが、きっと町中の奥さんの間で噂になっていることでしょう。

ちくしょう、なんて運が悪いんだ。俺は心の中で涙を流しながら、家まで突っ走っていった。

これが、俺と彼女とのファースト・コンタクトだった。そしてまた、俺の過ごしてきた平凡な日常が、終わりを告げた時でもあった。

最悪の第一印象

家に到着すると、俺はまず彼女を押し倒……。モとい、居間のソファに仰向けで寝かせた。そこで俺はゆっくり彼女の体を眺める機会を得たわけだが、うーん、服の上からかすかに覗ける胸の谷間が悩ましいです。しかしスタイル良いなー、細身だし。モデルとしても通用するんじゃないだろうか。いや、実際そうなのかも。脳内から『このままいつそ剥いでもおうよ！』という悪魔の囁きが聞こえてはくるのだが、あいにくそれを実行する勇気は持ち合わせてないので、眺めるだけである。ちくしょう、俺の根性無しめ。

しばらくはずっと様子を見守っていたのだが、そこで俺はようやく美野里さんのことを思い出した。しまった、すっかり忘れていた。現在時刻を見ると、5時32分。大丈夫だ、まだ間に合う。俺は居間に彼女を置き去りにしたまま、先ほどの疲れを物ともせず、もの凄いスピードで廊下を突っ走り、階段を駆け上がった。そして荒々しくドアノブを回す。

自室に入るとすぐさま、机の引き出しの中に置いてある双眼鏡を取り出し、装着する。そのまま隣の家に面した窓にかかっているカーテンを少しだけ開き、その隙間から美野里さんの部屋の様子を伺う。幸いかな、彼女はちょうど着替えの真っ最中であった。シャワーを浴びたことで桃色に染まっているみずみずしいお肌、若妻らしい成熟した肢体、そして下着の中から存在を主張している巨大な母性の塊が、俺の視線を釘付けにする。仕方があるまい、俺はどこにでもいる健全な男子高校生なのだ。男子高校生なら変態、変態なら

正義。簡単な三段論法である。俺は美しき女神の無防備な姿にすっかり心を奪われてしまった。

そのために俺は、背後に突っ立っている女性の気配に気づかなかった。

「
○□□？」

何を言っているかは聞き取れなかったが、紛れもない女の声がした。俺はおそろおそろ後ろを振り返る。

「
・・・え」

居間に寝かせて置いた彼女が蒼く光る目で、こちらを困惑顔で見つめていた。

男性諸君は考えてみてほしい、何か女性に後ろめたいことをやっているときに、女性から話しかけられたときの心境を。そのとき俺は、双眼鏡を見えないように隠すとか、カーテンをさりげなく閉めるとか、適当な説明をして上手くごまかすか、逆に開き直ってみるとか、取りあえず何らかのアクションを起こすべきだったのである。しかしながら、俺は彼女を見つめたまま何かを言うこともなく、両手に双眼鏡を持ったまま硬直するという、最悪ともいうべきパターンをとってしまったのだった。何を言われたか分からなかったので、反応出来なかったというのもあるかもしれない。外国語だろ

うか。もしかして、ただ外国に住んでいたというだけで凄いもの扱いをされるという、噂の帰国子女というやつか？ いや、そんなわけがないな。むしろ帰国子女ならば日本語話せるだろ、普通。ということは外国人か？ そっぴいやケに色白だと思っただよなあ。でも、アメリカとかヨーロッパとかロシアとか、俺が何となく想像した『白人がいそうな国』の人という感じはしない。かといって改めて見つめてみると、日本人というにはやっぱり何か変な感じがするというか、蒼い瞳の純日本人なんていないだろ。

彼女はつつ立ったままの俺を、訝しげに見ていたが、やがて何か気づいたような表情をすると、俺の側に詰め寄り、その右手を俺の額にかざした。も、もしや。俺の頬を冷や汗が伝う。まさか彼女は有数の相撲マニアで、生の相撲をその目に焼き付けるために来日したは良いが、外国通貨を日本通貨に両替することを失念していて、更には日本語をまったく学習しておらず、誰かに助けを呼ぶことも出来ずに、空腹に陥って倒れていた。そして通りがかった美少年に救助され、その優しい男の家で目覚めたのは良いが、あまりの空腹に俺を脅迫して、飯を作らせようとしているのか。もし俺の推測が正しければ、このフォームは日本が世界に誇る伝統格闘技『相撲』の技、『突っ張り』の準備態勢！ 俺が抵抗すれば即座に彼女の右手が俺の額を吹き飛ばし、彼女は嫌がる俺を無理矢理……い、いやん、俺まだ心の準備出来てないのに。

気がつけば、彼女は俺を見ながら何やら小言で何か呟いている。な、何言ってるんですか、もしかして呪いの言葉でも口走ってるんですか。怖いよ、何だか不気味だよ。助けてお母さああああん！

結論から言えば、俺のまったく想像していなかった現象が起きた。彼女のかざしていた右手から、青白い光が発せられ、俺は眩しさに目を閉じた。何だか、頭の中を探られているようで、頭がムズムズする。その光は数秒間で消え失せたようで、同時に俺の感じた違和感も収まった。俺が再び目を開けると、彼女は既に手を下ろしていた。な、なんですか。このオカルトじみた現象は。もしかして彼女は超能力者なのでしょうか。

「何してんの？」

今度ははっきり聞こえる日本語で、彼女はそう言った。しかし、さっきの不可思議な現象ですっかり頭がクルクルパーになっていた俺は、またしても返事をする事が出来なかった。

余談だが後日、彼女自身に訊ねてみたところ、このとき彼女は俺に『言語複製の魔法』をかけていたらしい。この魔法は、かけた相手の話せる言語を自らの脳内に完全コピーすること出来るという、外国語の勉強が格段に楽になる、学生必見の魔法なのだ。ただし、可能なのは人語だけらしい。犬語や蛇語は流石に無理らしい。もちろん、このときの俺がそんなことを知っているわけではない。

「ちょっと貸して」

黙っている俺に痺れを切らしたのか、彼女はぶっきらぼうにそう言っと、ひったくるようにして俺の双眼鏡を奪った。そしてカーテ

ンの隙間から、さっき俺がしていたように外を覗こうとする。やば
いって！ 途端に俺の体は、さっきまでの硬直が嘘のように彼女を
止めようと動き出した……。が、時は既に遅く、彼女は双眼
鏡の向こう側にある景色を見てしまった。俺と、そして今度は彼女
までもが、凍り付いた。

長い沈黙の後、彼女は俺にゆっくりと、本当にゆっくりと振り向
いた。顔には軽蔑の感情がはっきりと浮かんでおり、眼差しはま
るで汚物でも見ているかのようなものである。彼女は俺を睨みつけながら、
吐き捨てるように言った。

「最低」

こうして俺と彼女の関係は、彼女の発した言葉通りの状態から始
まった。

変態と双眼鏡

「つまり」

俺が今さっきやっていたことを包み隠さず、それでいてオブラートに伝えようと、厳しい視線のまま俺にそう言った。相変わらず口調は冷たい。

「アンタはスケベ心から、隣に住んでいる若い奥さんのプライバシーを、ここから毎日毎日覗き見してるわけね」

俺は厳粛に頷いた。

「まあ、そういうところだ」

彼女は目にも止まらぬ早さで、俺の左頬に強烈な右ストレートを食らわした。衝撃で俺の体は3メートル後ろの壁に叩きつけられたよ。ええ、もちろんダウン取られました。ウィナーはもちろん彼女です。それにしても相撲の次はボクシングですか。次は空手の技でもくるのかねえ。

「いてて………」

痛む体を何とか起こして立ち上がる。体の節々がズキズキした。

そして、彼女の攻撃は口撃へと変わった。

「信じられない！ コソコソ女性の着替えを覗き見るとか、どんな神経してんの！？ よくそんなこと平然と出来るわね！ 罪悪感と

かないわけ！？ 人として頭おかしいんじゃない！？ このスケベ
！ 変態！ 色魔！」

終わることを知らない彼女の罵声の連続。 ああ、こんなに綺麗な
美少女の中身が、とてつもないドS女だったなんて。 彼女の口から
絶え間なく俺の耳に入ってくる言葉は残酷鋭利で、情け容赦手加減
という類の物はまったく含まれていませんでした。 添加物0パーセ
ントです。 ナチュラルです。 自然には優しいです。 しかし、ボクの
心には全然優しくありませんでした。 内蔵がえぐれている感じがし
ます。 いや、むしろ切り刻まれているといった方が良くかもしれま
せん。

やがて、俺の心に一つの感情が芽生えた。 俺は彼女を無表情で見
つめる。

「な、何よ」

俺の内面に起きた変化を動作の中に感じたのか、彼女は罵声を止
めてそう言った。 口調の中に、彼女の動揺と不安がにじみ出ている。
俺は口を開いた。

「もっと・・・・・・・・罵って下さい」

しばらくの沈黙。

眉をひそめて、彼女がこの空気を破った。

「今、何て？」

俺は恍惚の表情を浮かべて、さっきの言葉をもう一度繰り返した。

「もっと・・・・・・・・罵って下さい」

今度は、数分間沈黙が続いた。いてもたってもいられず、今度は俺から静寂を破り、早口でまくしたてた。

「もっと殴って下さい。もっとぶっ飛ばして下さい。蹴りつけて下さい。踏みつけて下さい。お尻をぶって下さい。鞭で打って下さい。縄で縛り付けて下さい。ボクのことを、沢山いじめて下さい」

彼女は青ざめて、俺から離れようと後ずさった。そして目線を外し、まるで可哀想な物を見るような目でちらちら俺を見た。明らかに引いていた。そして呟くように言った。

「気持ち悪い・・・・・・・・」

俺は胸の中が、キュンと高まった気がした。もっと、もっと言ってくれ！俺は心の中で祈ったのだが、しばらく彼女は微動だにしなかった。しかしその痛い目線も気持ちいいよあ。しあわせえ。

夕焼け空が夜空へと変わった頃、俺は自分を取り戻した。危なかった、もう少しで変な趣味に目覚めてしまうところだった。そして俺はベッドに座り、彼女は机の椅子に腰掛けている。未だに目線がキツイ。それにノーマルに戻ったせいで、それが嬉しくも何ともない。

「まあ、何だ。さっきのは一種の気の迷いと言う奴だ」

「かなりマジだったように思えたけど」

「いや、俺は至って普通の男子高校生だ。変な性癖などない」

「変態じゃない」

コイツは男子高校生というものをちっとも理解していないな。俺は大きいため息をつく。

「普通の男子高校生は変態なんだ」

彼女は顔をしかめた。

「アンタの言ってる男子コーコーセイっていうのはイマイチよく分かんないけど、相当ヤバい人種みたいね。犯罪者予備軍の集まりじゃない」

あれ？ 俺は何だか戸惑う。どうして高校生という単語が通じないんだ？ というより、なんで彼女は今、日本語を話せているんだ？

今更かよ、と自分でも思う疑問を、俺はその時になって初めて感じた。

またもや余談ではあるが、『言語複製の魔法』は自分の知識内の言語しかコピー出来ない。簡単に言えば、頭の中でイメージ出来ない言語はコピー出来ないということだ。スイカを知らずに、ウォーターメロンの単語は覚えられない。つまりはそういうことだ。何でスイカは英語でウォーターメロンなのだろうか。メロンと混同してややこしいと個人的には思う。まあ、俺は好きだよ。メロンくらいの大きさも、スイカくらいの大きさも。え、何を言ってるのか分からない？ 大人の話だ。気にするな。

「ところで、私も聞きたいことがあるの」

初めてかもしれない。彼女が俺にマトモな会話を仕掛けたのは。

俺は勢い勇んで答える。

「お淑やかな人が良いかな。そんなもって家事が得意で、細やかな心配りが出来る人。後、メロンくらいはがあると嬉しい」

「いや、私そんな情報を聞きたいわけじゃないんだけど」

あれ、何だか会話が噛み合わないな。俺の頭の中にいくつものハテナマークが浮かぶ。

「え。俺の好きな異性のタイプを聞いて、それに合わせようと思ってくれたんだろ？」

「ちゃうわ！」

今度はかかと落としが炸裂しました。予感的中したようです。凄いなあ、俺。予言者とか向いてるかも。ていうか、何で関西弁やねん。

「私が聞きたいのはコレについてよ、コレ」

彼女は、ずっと手に持っていた双眼鏡を振った。

「それ？ ただの双眼鏡だぞ」

「へえ、ソーガンキョーって言うのね」

彼女は双眼鏡を、まるで宝石を眺めるようにうつとりと見た。おいおいちょっと待て。なんでただの双眼鏡ごときにそんな表情になるんだよ。ていうか、双眼鏡知らないのか。

「そんなに双眼鏡が珍しいのか？」

「ええ、『視力強化の魔法』を物に固定して、その効果を持続させるなんて凄いわ。これ、アンタが作ったの？」

「いやいやいや、人を散々異常者扱いしたくせに、おもいつきりお前の方がずっと電波なこと言ってるじゃねえか！ 何だよ詩力狂歌の魔法って！ 詩なのか狂言なのか短歌なのか分かんねえよ！」

俺はそんなツツコミを取りあえず心の内に留めておいて、努めて冷静に言った。

「いや、それは市販の双眼鏡だよ。どこにでも売ってる。魔法なんて非現実的なものは使われてない。それよりお前、一体何者なんだ？」

俺は一呼吸、間を置いた。彼女は黙って、俺の言葉に耳を傾けている。俺はまた口を開いた。

「突然日本語を喋れるようになったかと思えば、高校生なんていう一般常識を知らない。それに、ただの双眼鏡なんかに目を輝かせている。何故なんだ？」

喋り終わり、俺は口を閉じて彼女の返答を待つ。彼女はしばらくして、言葉を選びながら言った。

「それは、私がこの世界の住人では無いからよ」

魔法

俺は最初、彼女の発した言葉の中身があまりに突飛すぎて、素早く理解することが出来なかった。取りあえず天井を見上げつつ、ひらがなで考えてみる。

『それはわたしがこのせかいのじゅうにんではないからよ』

うーん、切れ目がよく分からない。ということで、漢字に変換してみる。

『其れ綿滋賀子之背会の十人で花井からよ』

其れ 綿 滋賀子 の 背 会 の 十 人 で 花 井 から よ。
なんとなく分けるとこんな感じになった。つまり、訳するところいうことだ。

『彼らは、綿滋賀子さんの背を愛でる会の十人で、花井さんから派遣されてきた』

いやいや、ちょっと待て。綿滋賀子さんと花井さんって誰だよ。
なんで背を愛でるんだ。十人って、何だか選ばれし者の響きがするけど気のせいなのか。

上記のような自問自答を経て、俺はやっと事の重大さに気がつい

た。これはヤバい。本気でヤバいぞ。俺は彼女に視線を戻す。

「つまり、お前は異世界から来たってことか？」

彼女はコクリと頷く。俺は冷や汗が頬を伝うのを感じた。

「そうよ」

「そして、その世界には魔法が実在すると？」

「そのような表現の仕方からすると、どうやらこの世界には魔法が存在しない、ということね」

「ああ、そうだ」

「モンスターもいないの？」

「モンスター？ 動物じゃなくてか？」

「ええ。動物は基本的には人畜無害。けれどモンスターは故意に害を与える恐ろしい怪物。ちなみに私は彼らを従える、魔王なんだけどね」

うむ。これは本当に、ヤバい。早急に対処しなければ。

「だいたい事情は飲み込めた」

「そう」

彼女は少しホッとしたようだった。

「アンタみたいなのでも、取りあえず話が通じて良かったわ」

「病院に行こう」

彼女は目をパチパチした。

「……………は？」

「病院に行こう、と言ったんだ」

俺は深呼吸をして、自らの気を沈める。あくまで冷静に、過度に刺激しないようにしなければ。

「落ち着いて聞いてくれ。おそらく君は何らかの大きなショックによつて精神、もしくは記憶に異常をきたしている。魔法なんてものは現実には存在しないし、モンスターなんて架空の生物だ。君は魔王なんかじゃない。れっきとした人間だ。取りあえず病院に行つて、精密検査をしてもらおう。大丈夫、治療を受けたらきっと元の自分に戻るさ」

我ながら完璧な説得だ。これで彼女も、きっと俺の事を信用してくれるに違いない。

彼女はソファから立ち上がると、ゆっくりと俺の方へと近づいてきた。顔は、怖いくらい無表情である。

これはヤバいですね、はい。目が笑っていません。どうやらさつき危惧した『過度の刺激』というものを与えてしまったようです。俺は最近まで月曜日の午後9時から放送されていた一時間ドラマ『お前の机の上のラブレター』によるしく』を思い出した。これはとある男子高校生が大胆にも放課後、好意を抱いている女子の机の上にラブレターを置いて帰ったのだが、翌朝その手紙を見た女子高生はそれを自分への果たし状だと勘違いし、この事が学校中を巻き込む大騒動に発展していく……というものだった。つまり俺が何を言いたいのかというと、おそらく彼女は精神錯乱のあまり、自らを異常者と言い切った俺を敵だと認識しまっているらしい、ということだ。早くここから立ち去ろう、下手すると命を落としかねない。

などと妄想を膨らませていた間に、彼女は俺の目の前に立っていました。なんということだ、逃げることを考えるあまり逃げる時間がなくなってしまうとは。本末転倒じゃないか。彼女の右手が、手のひらを返した状態で、俺の顔の前に開かれる。一般的な『お手しなさい』のポーズだ。これも何か格闘技の技なのだろうか。状況からして攻撃されるのは俺の顔なわけで、明らかに今までに比べて、耐久力的にダメージが大きい箇所です。殺る気満々ですね……・ってのんびり構えてる場合じゃない。

「話せば分かる、話せば分かるから落ち着いてくれ」

彼女は薄く笑いしました。笑いながら無言です。俺は背筋に寒気が走るのを感じた。これはいよいよ年貢の納め時かもしれない。ああ、美野里さん。最後に貴女の生着替えを堪能出来なかったのが心残りです。脳裏に、彼女の柔和な笑顔と、豊満な胸と、悩ましい体がい出される。ちくしょう、俺は最後の瞬間までこんななのか。

まるでガスコンロで火をつけたときのような音がして、彼女の突き出した手のひらの上に青色の火の玉が生まれた。いきなりのに度肝を抜かした俺は、とっさに後ずさりしようとしたが、なにぶんソファに座っている御身分だったので、叶わなかった。

「これでどう？ 魔法を使わずに炎を作り出すなんて、こっちの世界じゃ出来ないことでしょ？」

彼女は、もう納得出来るでしょ、とでも言いたげな目で俺を見た。

「いや、技術のあるマジシャンなら、そういうことは出来る。前に路上で見たことがある」

彼女は怪訝そうな顔をした。

「魔法は存在しないのに、魔法使いはいるの？」

「いや、そっちの世界のマジシャンとはちよつと違う。詐欺をして人々を楽しませる仕事をしてる人たちのことだ」

「ふーん、なんだか想像がつかないわ。それにしても、困ったわね」

彼女は腕組みをして考え込み、やがて何か閃いたように左上の手の平を握った右手で叩いた。

「そうだ、これならどう？」

彼女は俺から離れ、周りに空間を確保すると、何やらブツブツ唱えだした。俺は黙って、その様子を見守る。

やがて彼女を中心に、地面に茶色く光る五亡星が勝手に出現した。そして、同じ形をしたものがもう一つ、彼女の正面の床に出現した。

彼女は唱え終わったようで、じっと目の前の五亡星を見つめていた。そしてしばらくすると、その五亡星の中から化け物のシルエットが浮かび上がって、やがて実体化した。

彼女の過去と、俺の決意

『それ』は俺、つまり平凡な男子高校生と比べて、ずいぶん逞しい体つきをしていたが、外見は人間に近い。俺の頭の中にあつた、架空の生物の名前が浮かぶ。

「……ゴブリン」

俺は思わず声に出していた。

「あら、なんだ。コイツも知ってるわけね」

彼女は残念そうに言った。どうやら、向こうの世界でもゴブリンという呼称らしい。

「いや、そんな生き物はこの世界にはいないはずだ」

この世界、と俺は呼称した。この時、俺は既にこの現実を受け入れ始めていたのだ。いや、受け入れざるをいけなかった、の方がしっくりくるかもしれない。俺はじつくりとゴブリンを観察する。ゴブリンは魔法陣の中央に立ち尽くしたまま、身動き一つしない。俺は魔法陣に近づいた。

青い火の玉は、よくある小手先のマジックの一つだろうと考えることが出来た。しかし今回はどうだ。まず、床に現れている魔法陣。床に初めからトリックを仕掛ける暇なんて、なかったはずだ。俺は覗き見していたとき以外、この少女と行動をとみにしていたのだから。そして、何もない空間からこのゴブリンを発生させたこと。マジシャンはよく手の中から薔薇を取り出したり、シルクハットの中

から白い鳩を出現させたりするが、その裏には『目には見えない場所から出てくる』という大前提があるのであって、こんな風に文字通り丸見えの場所でそれを行うことが出来るとはどうしても思えない。それにゴブリンが作り物だとも思えなかった。肉質感や、赤い眼孔。体に残るいくつもの傷跡。全てが生々しかった。特殊メイクとは思えない。

「このゴブリンは、お前の召使いか何かか？」

「ええ、『契約』を結んでいるから好きなときに呼び出せるのよ」

『契約』とやらが何かはともかくとして、俺はどうやら彼女の言うことを信じないわけにはいかないらしい。俺は彼女の方を振り返る。彼女の足下にも、未だ魔法陣が残っていた。

「つまり、お前は本当に異世界の魔王なわけだな」

「やっと信じる気になったのね」

「まあ、こんな実物を見せられたら信じないわけにはいかないだろうよ」

俺はゴブリンの方を振り返る。相変わらず、動かない。

「それじゃ、彼は元に戻すわよ」

そう言つと、また彼女は何かを唱え始める。程なくして、2つの魔法陣とゴブリンは、跡形もなく消えた。

その後、俺は彼女と先ほどのようにソファに座って向かい合い、彼女の話聞いた。

彼女は元々、異世界のとある大陸を支配する魔王の一人娘だったらしい。彼女の父、そしてその同士達は、彼女の世界を征服する野望に向けて日々頑張っていた。しかし先日、腹心の部下であった魔族のクーデターにより、父親は失脚してしまう。父親とその家族、そして彼らに忠誠を誓う一部の魔族達はクーデター派の魔の手から命からがら逃げ出すことは出来たものの、散り散りになってしまう。彼女は両親と行動して、とある谷を抜けようとしたのだが、暗殺部隊に追いつかれて、逃げるうちにととう後ろは断崖絶壁という所まで追い込まれてしまった。そこで両親は彼女を逃がすために、最後の力で彼女をこの世界へ送り込んだのだった。そのとき彼女の見た最後の光景は、数多くの魔物が傷だらけの父親と、その横にそっと寄り添う母親に襲いかかる場面だった。話を進めるにつれて、彼女の顔はだんだんと暗くなっていた。無理もない。きっと自分の両親の安否が心配なのだろう。

俺は俺で、この少女にそのようなハード過ぎる過去があった事を知ったために、ひどくショックを受けた。それと同時に、口には出さなかったが、今までの軽率な行動に対する罪悪感も湧いてきた。

「辛い思いをしたんだな」

俺は正直な気持ちをストレートに表現した。言ってから、他人事のような表現になったことを後悔した。彼女は下を向いて頷いた。やがて、水滴が彼女の膝を濡らし、静かな嗚咽が聞こえてきた。俺は慰めの言葉一つかけてやれず、黙って見つめることしか出来なかった。どうして誰かが心の底から傷ついているとき、俺は何もしてあげられず、優しい言葉すら投げかけられず、ただ無力なのだろうか。俺は自己嫌悪の気持ちをそらすために、下唇を噛み続けた。しよっぱい血の味が何となく心地よかった。

「お願いがあるの」

しばらくして落ち着いた彼女は、俺が淹れた紅茶の入ったティーカップを受け取りながら言った。

「私はこれから元の世界に戻って、父の土地を取り戻す。いや、それだけじゃないわ。両親のためにも、死んでいった同胞達のためにも、彼らの悲願だった世界征服を実現してみせる。けれど、土地も人員も、何もかもが不足してるわ。アナタに協力してほしいの」

彼女はそこで言葉を切り、俺の返事を待った。俺は紅茶を一口飲んで、ティーカップをテーブルの上に置く。

「協力っていつても、俺には何の力もないぜ」

「それでも、いないよりはマシよ。今の私には部下一人いないもの」

「さっきのゴブリンがいるじゃないか」

彼女はため息をつく。

「ゴブリンは力はあるけれど、頭は空っぽよ。私が欲しいのは、軍師だったり戦闘指揮官だったり、そういう人材なのよ」

なるほど。確かにその通りだ。俺は戦闘のプロフェッショナルではないが、戦略シミュレーション系のゲームはいくつかやったことがある。そういうゲームはシミュレーションRPGにおいて重大なウェイトを占める『戦闘パート』というものがありはするのだが、大抵その前の『プレイヤーがどのようにに戦闘に向けて準備していたか』によって勝敗が決まってしまう。例えば相手の有用な人材を引き抜いたり、仲間割れを誘発したり、政治的手腕で敵国を孤立に追い込んだり、そのような計略を行うことで戦いが非常に楽になっていく。それに、先ほどの言葉と矛盾する言い方だが、どんなに数的に劣勢な戦闘だったとしても、それを率いる指揮官次第で、不利な状況を巧みな戦術で押し返すことも出来るだろう。戦いはただ闇雲に突っ込めばよいというわけではないのだ。現実の戦いとゲームのそれとがまったく同じ作りだとはいえないだろうが、彼女の言いたいことはそういうことではないだろうか。頭の切れる策略家。そして熟練したスキルを持つ、戦闘指揮のプロフェッショナル。例えばどんなに力が強くて、これらの役目は決して出来ないだろう。力だ

けが強さではないのだ。

俺にそのような役目が務まるのか。正直な気持ち不安はあった。けれど、先ほどの彼女の顔が、俺の不安をかき消した。何か彼女の役に立てるかは分からないが、取りあえず、孤独の彼女が信頼出来る仲間を取り戻すまで、その世界征服とやらに付き合ってやろう。

「分かったよ、協力する」

俺は笑ってそう言った。

「ありがとう」

彼女もまた、笑った。彼女が俺に見せた、初めての女の子らしい、はにかむような笑顔だった。

第一次浴槽突入作戦

俺は自分と彼女の間にあつたわだかまりが薄らいでいくのを感じて、安堵の気持ちを抱いた。しかし微笑んだままの彼女の口から飛び出してきた発言が、その気持ちを空の彼方へすっ飛ばしてしまつた。

「じゃあ、アンタは私の家来第一号ね。当然、この土地と住居は私の物になるから」

えーっと、似たようなフレーズどこかで聞いたことあるぞ。なんだったかな。そうだ、思い出した。中学校のときに体育館で放送された、悪徳金融についての教育ビデオだ。口車に乗ってしまつたあげく、確か借金が雪だるま式に増えていって、しまいには全財産を接収されてしまったんだっけ。教育ビデオにしては後味が悪いストーリーだったよ、うん。

っておい。

「ちよーっと待った！ 何でこの家をお前にやらねばならんのだ！」

「は？ 何言つてんの？ 家来なんだから、本拠地くらい提供しなさいよ」

「そういうことは先に言えよ！ それにここは俺の持ち物じゃないし」

この家は我が父が、20年ローンを組んでやっと手に入れた家なんだぞ。後9年も残ってるし。

まあそんなこんなで、さっきの感動は何処へ行つたのか、俺たちは言い争いを始めたのだが、彼女はしぶしぶ、この土地と家は取り上げないことを了承した。

「でも、私の寢床くらいは提供しなさいよね」

確かに彼女を外に放り出しておくのは気が引ける。こんな美少女が公園のベンチなんかで眠っていたら、変質者がほっとかないだろ、普通。まあ、この家の中にも俺がほっとしておかないんですけどね。けけけけ。

「分かった。取りあえず2週間は親も帰ってこないから、しばらくはここを使ってくれ。寝るときは俺の横にすれば良いし」

ぶん殴られました。

「ソファで寝る」

「はい」

腫れ上がった右頬をさする。すんごく痛いです、トホホ。

と、そのとき。彼女のお腹が凄じ勢いになった。そう、擬音語で表現するなら『ぐぎゅうぎゅぎゅぎゅうぎゅぐるるる』といった感じだろう。

彼女は怒りの表情から一変して、りんごのように顔を真っ赤にして俯いた。まるで恥じらう乙女である。ヤバイ、可愛すぎる。心の中でちょっと胸がときめいた。しかし、なにしろ効果音が面白すぎ

た。

「ぎゃはははは！ 何だその腹の音！ まるで怪獣の鳴き声じゃねえか！ あひゃひゃひゃひゃ！ は、腹が痛い！ ぎゃははははははははははは！」

一瞬にして彼女の顔から表情が消えた。

「そう、腹が痛いよね。治療してあげる」

淡々とした口調で告げた彼女は、素早く俺との間合いを詰めて、得意の右ストレートを俺のへそにぶち込んだ。

「ぐげえ」

俺は泡を噴きながら、ソファから崩れ落ちた。

「まるで、カエルみたいな声ね」

彼女は床で悶絶している俺に、冷たく言い放った。ちくしょう、実力行使なんてそんなの反則だ。いつか訴えてやる。

驚異の生命力で回復した俺は、晩飯を作ることにした。時計を見ると、午後9時をまわっていたし、俺も彼女に負けず劣らず腹が減っていたからだ。

俺はフライパンにサラダ油を少し引き、ガスコンロの火をつける。油が泡を噴き始めたので、二人分の白飯と、チャーハンの素、そして色とりどりの野菜をつっこみ、箸でかき混ぜる。頃合いを見計らって、予めといておいた卵を投入した。

今回のように親がどちらともいない時がときどきあるので、俺は簡単な料理なら調理することが出来る。無論、食べるだけなら冷凍食品やインスタントラーメンでも問題ないのだが、調理する感覚が何となく好きなので、俺は度々自分で料理をする。聞くところによれば、彼女は逃亡中にまともな食事が出来ていなかったそうなので、俺は栄養のことと考えて、野菜をたっぷり入れたチャーハンを作ることにしたのだ。その間、彼女には我が家のお菓子カゴにあった、煎餅を与えておいた。

「凄く美味しいじゃない」

彼女は一口かじって、それから貪るようにバリバリ音を立てながら食べ始めた。300円の特価品なんだけどな、それ。

出来上がったチャーハンの入った皿を目の前に置くと、これまた彼女は凄い勢いで食べ始めた。相当、腹が減ってたんだろうなあ。そう思いながら、俺はチャーハンを味わって食べた。うん、味は悪くない。

「アンタ、意外に料理上手だね。ビックリしたわ」

褒められて悪い気はしない。俺は照れ隠しに頬をかく。

「まあな」

彼女の皿に多く盛ってやったから、食べ終わるのはほぼ同時だった。彼女が風呂に入りたいと言いだしたので、俺はお湯を浴槽に張ると、彼女を風呂場へと案内した。向こうの世界には、どうやら機械類は存在しないようで、俺がシャワーの使い方などを教えてやると、興味しんしんで聞いていた。

そして、彼女は今、上機嫌でお風呂に入っている。

私は居間から音を立てないよう慎重に移動し、現在は脱衣所に待機して様子を見ている。賢い諸君ならば、私が何を考えているかは分かるだろう。つまりだ、私の家の風呂場とこの部屋を隔てるドアには、鍵がついていない。つまり、いつでも突入可能だということである。これはやるしかあるまい。この作戦の結果として命を落としたとしても、その勇気ある行動は日本男児として誉れあるものであり、私は同報達から未来永劫の尊敬を集めるであろう。この僅か数メートル先には、女性が生まれたままの姿で存在しているということだけが、今の私にとって価値のある真実である。

もはや、迷いはない。

私は全速力でドアノブを掴んだ。

「あれ？」

開かない。ドアノブをまわして押してもビクともしない。

「……………何してるわけ？」

ドアからでも微かに見える、肌色のシルエットが、怒りに震える声でいった。

「いや、あのですね。お背中でも流そうかと思って。えへへへ」

一瞬の沈黙。そして。

「このケダモノが！」

「ギヤアアアアアアア！」

突如、ドアノブから高圧の電流が流れ、体がもの凄い痙攣を起こし、俺は地面に倒れた。意識を手放す前に視界に入った俺の両腕は、黒こげになっているように見えた。

彼女の名前とこれからと

気がつくと、俺はソファの上に寝かされていた。彼女が運んだのだろうか。彼女は俺が用意しておいた、母のパジャマを身につけて、他方のソファに腰掛けて牛乳を飲んでいる。服のサイズが少し大きいようで、両手がほとんど袖口に隠れていた。

起きあがろうとしたが、体が痺れてうまく動けない。彼女は俺が目を見ましたことに気づいた。視線は冷やかである。

「あら、もう起きたの。意外に魔法に対する耐性はあるのね」

「女性から半殺しにされるのは慣れてるんでね」

俺はおどけて言った。ちなみにこれは冗談では断じてない。

最初に半殺しにあったのは、小2のときだっただろうか。クラスメイトの女子数人のお尻をイタズラ半分に触ったことで、確か公園にある水色のゴミバケツの中に無理矢理押し込まれた。体中の骨という骨が無茶な体勢に悲鳴をあげたのを覚えている。3日間が経つて、俺は地元ボランティアの方に助けてもらったのだが、しばらくは前かがみで生活せざるを得なくなつた。ちなみに実行班達は、お咎めなしであつた。むしろ、救助された俺の方がたっぷりお説教を食らつた。

「そういえば、どうしてさっきドアが開かなかつたんだ？」

「どこかの変態が何かやらすかもしれないから、『固定の魔法』をかけておいたのよ。ついでにちよつと細工をして、ドアを開けよ

うとしたやつには電撃が走るようにしておいたわけ」

「ほお、魔法って何かと便利な代物だな……って、ちょっと待てよ。」

「つまり、俺のことを信用してなかったのか！ あんまりだぞ！」

「自分の行動を振り返ってみれば」

「すごい迫力で睨まれたので、俺は萎縮するしか出来なかった。」

「ところで、これからどうするんだ？」

「俺は彼女に尋ねた。体の痺れはもう回復している。」

「そうねえ」

「彼女は壁にかかっている時計を見る。時刻はもう午前0時を過ぎていた。」

「今日は遅いし、もう寝ましょ。明日になったら、実際に私達の世

界に行ってみましょ」

「え、そんなに簡単に行けるものなのか？」

確か彼女の両親は、最後の力を振り絞って彼女をこの世界へ連れてきたはずだ。世界を飛び越えるというのは、それだけ困難なことだと思っていたのだが。

「自分自身の世界に戻るというのは簡単なことなのよ。ただ、異世界に転移する場合は、かなりの魔力が必要なの」

両親のことを思い出したのだろうか、彼女の顔が曇る。俺は慌てて話題を先に進めた。

「つまり、向こうに行くというのは問題ないんだな。だけど、こっちの世界帰ってくるときはどうするんだ？」

「アンタがついてくるなら、その点は心配無用よ。詳しくは帰るときに説明するわ」

「分かった。それともう一つ、向こうの世界に行った後、こっちには帰ってくるのか？ 俺はこっちでの生活も大事だから、休日以外はこっちで暮らしたいんだが」

流石に、学業に影響するのはマズい。

「そうね。ガルザークも私の命を狙っているでしょうし、向こうに長居するのも危険ね。しばらくは日帰りになるわ」

「ガルザーク？」

「父を裏切って魔王の座に着いた奴よ」

苦虫を噛み潰した顔で、彼女は忌まわしげに言った。

「それじゃ、俺はそろそろ寝ることにするよ。くれぐれも家の外には出るなよ。飲み物は冷蔵庫の中に入ってるから、喉が乾いたら適当に飲んでいてくれ。後、むやみに物には触るなよ」

「分かってるわよ。教育係みたいなこと言わないで」

人が親切心から色々と忠告してるのに、この態度だよ、はあ。俺は心の中でため息をつく。外見は可愛いのに、中身はこれだからなあ。

「それなら安心だ、それじゃおやす……………」

「ところで、まだ自己紹介してなかったわよね」

そのとき、俺は未だに彼女の名前を知らないことに、今更気がついていた。

「私の名前は、フィオナ・ルシファード。誇り高きルシファード家の第56代目魔王よ」

「俺は速水浩治だ。コウジって呼んでくれ」

彼女は微笑む。俺も笑い返した。

「コウジ、ね。分かったわ、これからよろしく」

「ああ、よろしくな。それじゃあ、お休み」

「ええ、また明日」

これは、夢なんじゃないだろうか。ベッドに潜り込みながら、ふと俺は考えた。倒れていた美少女が異世界の魔王で、明日から自分は彼女の世界征服を手伝う。あまりにも現実離れした出来事。

「まあ、面白くなってきたし別に良いけどな」

思わず、口に出していた。毎日続くありふれた日常に内心ウンザ

リしていた俺が求めていたのは、きつとこういう事だったのだ。魔法が飛び交い、怪物と戦う、スリル満点の冒険。ワクワクするファンタジーを読み終える度、子供心に、いつか旅に出たいと思っていた。けれど成長するにつれて、現実はおとぎ話のように、胸躍らせる世界ではないということを思い知らされた。学歴社会、環境汚染、リストラ。現代社会は子供達が胸に抱く幻想を、跡形もなくぶち壊していく。そして俺はいつの間にか、世界に期待することもしなくなっていく。与えられた自由の中で、精一杯自分らしく生きてみようと思った。だがその日々も、もう終わった。頬をつねってみる。痛みは、明らかに今日という日が本当であったと証明した。明日は、異世界に行くのだ。俺の待ち望んでいた、幻想が始まる。そう思うと、自然と頬が緩んだ。やがて、睡魔が襲ってきたので、俺は目を閉じる。意識を手放す直前、何故かフィオナの笑顔が浮かんだ。

穏やか天気と裏腹に

けたたましく鳴り響く目覚まし時計の音で、俺は目が覚めた。取りあえずアラームをオフにして、階下へと降りる。

フィオナの様子が気になって居間を覗くと、彼女はソファに寝転がり、昨日渡しておいた布団を被ってすやすやと寝ている。俺は彼女の安らいだ寝顔を見て、少し和んだ。

脱衣所まで行き、顔をぬるま湯で洗い、歯を磨く。歯磨き粉から漂うミントの香りが、脳を活性化させていく。

キッチンに着くと、俺は朝食の準備をする。今日の献立はベーコンに目玉焼き、作りおきのサラダ、そして味噌汁である。彼女の昼の分も作っておかなければならないので、朝にしてはかなりの分量になった。

俺がテーブルに朝食を持っていったとき、彼女はまだ眠り続けていた。

「おーい、起きろ」

返事がない。微動だにしない。

「朝飯が出来たぞ」

今度は布団の上から肩を掴んで揺さぶってみる。

「むにやむにや……逆らう奴は皆殺し……むにや

むにゃ」

なんだか、寢言にしてはヤケにハードな内容である。どんな夢を見てるんだよお前は。しかし、これは生半可な起こし方では効かないようだ。ならば、仕方あるまい。俺は最終作戦に出るとする。俺は彼女の耳元に口を寄せて、大声で叫んだ。

「起きろー!」

彼女はビククリしたようで、少し飛び上がった。

「よし、起きたか。おはよう」

「おはよ………。もう、耳元で怒鳴らないでよ」

未だに眠いようで、左手で目をこすっている。

「何回も起こしたんだぞ。もう朝飯は出来てるから、顔洗ってこい」
力なく頷くと、彼女はおぼつかない足取りで、脱衣所まで歩いていく。朝に弱い性分なんだろうか。

いや、と俺は頭を振る。きっと、これまでの逃避行の疲れが出たのだろう。ろくに休むことも出来なかっただろうし。

それにしても。俺は心の中で苦笑する。これじゃ、まるで俺が母親みたいだよ、まったく。

朝食を食べ終わると、俺は制服に着替え、学校の準備をした。そして彼女に、学校があるから帰りは5時くらいになること、くれぐれも外に出ないこと、昼食はテーブルの上に置いてある弁当箱の中に入っていること等の諸注意をして、家を出た。

さて、今日も春らしく良い天気だ。晴れ渡っている空、清々しい風、素晴らしい1日のスタートだ。途中、いつも目につく奥様グループとすれ違う。

「奥さん、あの子ですよ。変な格好した女の子を腕に抱えて、興奮しながらこの町内を駆け抜けてたって噂の高校生」

「ええ、そうなんですか？ 確か、その女の子って気絶してたんですよね。しかも衣服が乱れてたっていうし」

「しかも体中にいくつもの痣があったそうよ。もしかして無理矢理迫ったのを拒否されて、それで……」

「やあねえ、まるでケダモノだわ」

「前々から変な子とは思ってたのよね」

「警察に連絡した方が良くないかしら」

……なんだか、噂に尾ひれがついて、凄いことになって
いるらしい。それにしても、『前々から変な子』ってあんまりじゃ
ないか。俺は心の中で、号泣した。

それからというものの、すれ違ふ奥様がみんな俺の方を胡散臭そう
な目で見つめてくるので、俺は早く学校に着きたい一心で、いつの
間にか風のごとき猛ダッシュで通学路を駆け抜けていた。無論、そ
れがさらなる注目を浴びたのは言うまでもない。

「お、今日はいつもより早いじゃないか」

1年3組の教室に入ると、クラスメイトの相原大輔あいはらだいすけが、俺に喋り
かけてきた。コイツとは小学校時代からの友人である。

「まあな、朝から嫌なモノを聞いちまったし」

「嫌なモノ？　なんだよそれ」

「内緒だ」

フィオナのことは、今のところ誰にも話すつもりはない。言ったところでまともに取り合ってもらえないか、大騒ぎになってしまうかの二択の想像しかつかないためだ。時がくれば母には伝えなければならぬが、まだその時はきていない。

大輔は、なんだそれ、と少し気になった様子ではあったが、すぐに別の話題を振ってきた。

「まあいいや。それよりさ、昨日の野球中継見たか？」

「いや、忙しかったから見てないよ。何かあったのか？」

「ふふふ、聞いて驚くなよ」

それから俺達は鼻肩にしているプロ野球チームで大いに盛り上がったのだが、一人の乱入者がその雰囲気をぶち壊した。

「ちょっと、コウジくん」

明らかな怒気のこもった声が、俺の後方1メートル以内から発せられた瞬間、俺は背後にいる誰かさんが誰なのかを、悟った。俺は振り返り、彼女に振り返る。

ポニーテールで、いかにも性格は勝ち気という顔をした少女がそこにはいた。眉間にしわを寄せている状態で。俺はなんとかご機嫌を取り、これから先の展開を少しでも良い方向へ持っていこうとし

た。

「やあ、おはようユリ。今日も素晴らしい天気だね。君も、この空に浮かぶ純白の雲に負けなくらい、美しいよ」

「雲なんて浮かんでないじゃない」

「そんなことは些細な問題に過ぎないよ。問題は君の額が少しばかりご機嫌斜めだったことさ。そんなことじゃ、せつかくの可憐な顔がシワだらけになってもつたないよ」

彼女の頬がピクピクひきつる。うーん、どうやら逆効果を与えてしまったようだ。コイツも黙っていれば可愛いのかな。

「聞いたわよ。昨日、隣のクラスの女子生徒に、またセクハラしたでしょう!」

「セクハラじゃない。いわゆる『ボディ・ランゲージ』というやつだ」

うんうん、と大輔が頷く。

「んなわけないでしょ! だいたいコウジくんは」

彼女の説教を食らうのはごめんだったので、俺はすれ違いざまに彼女のポニーテールを撫でつけて、廊下に飛び出していった。

「くら! 待ちなさいよ!」

「やーなこったー!」

彼女は顔を真っ赤にして追いかけてきたが、逃げ足だけは速いこの俺である。校舎を縦横無尽に走り回り、彼女を振り切ることは容易であった。

もちろんその後、ホームルームに遅れたために、担任の山田剛助先生に愛の鉄拳を食らわされたのは言うまでもない。

留守番中、違和感と共に

「退屈だわ」

ソファに寝っころがって、視線を天井に注ぎ込みながら、私・・・
・・・・フィオナ・ルシファードは呟いた。

この家の住人である速水コウジが学校に行ってから、2時間が経つ。外には出るなと念を押されていたし、かといって家の中の物は勝手に触るなとも注意されていたので、私はやる事も浮かばず、暇を持て余していたのだった。

とはいえ、ずーっとこのままというのも気が滅入る。じっと過ごしているなど、性分に合わないのだ。

それに、ずっと感じている違和感もある。コウジはこの世界に魔法など存在しないと言っていたけれど。

「明らかに、感じるのよね。魔力の残り火」

巧妙に消されている、魔法の痕跡。並の魔法使いではおそらく騙されてしまうだろう。しかし、確かにこの場所では『魔法が行われていた』はずだ。あまりにも微かな魔力なので、それが最近のことなのか、ずっと過去のことなのかまでは分からない。ただ、コウジの反応からして、彼の言葉が故意についた嘘だとも思えない。

つまり、『コウジが知らない間にこの場所では魔術が行われている』ということになる。謎ばかりでこれ以上は推測のしようがないが、警戒するべきことであるのは明らかだった。私以外に魔術の使

える者が、この世界にいるというのだから。しかも、私のすぐ近くに。

「お父さん……お母さん……」

寂しくなっと思わず呟いてしまう。そして脳裏によぎる、父と母の最後の姿。そして、声。

『フィオナ、お前は死ぬな』

『生きて、幸せになりなさい』

ブンブン、と頭を振る。暗い事を考えてもダメ。今は今のことを考えなきゃ。

考え事に耽っている間に、私のお腹はずいぶん空になってしまったらしい。へその辺りから、それを告げる声が聞こえてきたので、私は昨日の事を思い出し、赤面してしまった。時刻を見ると、もうお昼にしても良い時間帯だったので、私はテーブルの上に置いてある弁当箱を開けた。

中身は今日の朝食と同じメニューだったけれども、ご飯のみ海苔を巻き付けておにぎりにされていた。口に運ぶと程良い塩気がして、美味しい。アイツ、イメージに反して料理が得意なわけ。私はどんな食物を口に運びながら、彼の事を考える。最初に見たときはただの変態だと思ったけれど、話してみると意外に気配りの出来る男のような気がする。あくまで『気がする』だけなのけど。

退屈すぎる。

現在時刻、3時。アイツが帰ってくると発言した時刻まで、残り2時間。

「もう！ イライラする！」

こんな風に、時間を無駄に過ごす暇なんてないのに。しかし、アイツがいなければ私一人では行動出来ない。もどかしさという感情に任せて居間の中を歩き回る。ズン、ズン、ズン。

ポチッ。

そんな音が、聞こえた。どうやら、床においてあった奇妙な物体を踏んでしまったのが原因のようだ。途端に、目の前の箱のような物から、映像が浮かび上がる。テーブルを挟んで、二人の中年男性が向かい合って座っていた。どちらも、キチンとした身なりをしている。映像の右上には『元参議院議員、飯田準一郎が今回の衆議院選挙をバツサリ斬る!』と書いてある。

「うーん、今回の選挙のポイントは、どこでしょうか、飯田さん」

「そうですね、まず参議院で過半数を取っている『和風巫女さん党』がどれだけ議席を残せるかがキーとなるでしょう。後、特定の層に絶大な人気を誇る『熟女人妻党』の動向もポイントですね」

「しかし現在『自由メイド党』が衆議院での議席数トップですが、その辺はどうお考えですか？」

「うーん、自由メイド党は、スポンサーともいえる『全日本メイド協会』が少々過激な布教活動をしているせいか、国民内でも反感の声が高まっていますからね。今回は苦戦必死でしょう。メイド反対派の『抹茶味の鯛焼き』が実地しているボランティア活動で、国民からの人気が高まっているということもありますし」

「なるほど、では『禁断幼女党』での不祥事についてお伺いしたいのですが……」

何よ、コレ。私はその謎の物体から目を離せず、その場に固まっていた。

こんな不思議なもの、魔術の類が働いているとしか考えられない。だがしかし、この物体からは魔力を感じない。どういふことなのだろうか。

私はそれから、彼が帰ってくるまで延々と、その物体とのにらめっこを続けていた。

跳躍

ちくしょう、無駄足を踏んでしまった。あれから俺は休み時間が来る度、白山に追いかけられ続けた。おかげで授業は爆睡してしまい、おかげで田中剛助先生にはぶん殴られ、おかげで放課後に強制自習を課され、おかげで待ち伏せしていた女子グループにボコボコにされた。ちなみに主犯は昨日の女子生徒だった。ぐすん。白山のバカやるおおお。

ところで白山とは、白山（やましろ）ユリのことなのであしからず。白い山では断じてない。

というわけで、俺は予定時刻を1時間半もオーバーして、家に帰りついたわけである。ただいまの時刻は6時32分。フィオナ、きつと怒っているだろうなあ。予想されるであろう鉄拳制裁に、半分心震わせながら、半分胸躍らせながら、玄関の鍵を開け、居間に入ったのだが。

「……………何してるんだよ、おい」

何故か、彼女は我が家のテレビとにらめっこしていた。ちなみに放送されている番組は、おっちょこちょいの落ちこぼれロボットを、天才ハイテク少年がその知識力で助けてあげるという、一話完結型恋愛アニメ『セイラにやらせて!』だ。小学生向けの番組にも関わらず、大人にも支持される番組である。ちょっと奥さん、なんでそんなに殺気を帯びた目線を我が家のムードメーカーに送ってるんですか。子供が逃げちゃいますよ。

「コウジ、これはいったい何者なの？」

いや、そんな真剣な声で訊ねられても。ていうかこっち向いてよ。寂しくなるじゃない、ウサギは寂しいと死んじゃうんだよ。

取りあえず、俺は模範的の回答を試みる。

「テレビだけど」

「何よ、テレビって」

あ、そうか。コイツの世界にはテレビがないのか。俺はそこでやっと彼女の奇行の真意を悟った。

俺がテレビの説明をしても、彼女はイマイチその魅力を把握出来なかったようだ。

「ようするに、他人の会話を聞くだけのものでしょ？ 任意の相手を盗聴するならまだ使えるけど、そんなんじゃないの暇つぶしにしかないじゃない」

「いや、ただの暇つぶし用の道具なんですよ、コレ」

「ふーん。こっちの人間って、随分と平和ボケしてるのね」

その言いぐさに、平和を愛する国『日本』の民である俺は、流石に力チンときた。

「なんだその言いぐさは！ 日本国民が正当に与えられた平和という名の権利を自由に享受して何が悪い！ 日本国憲法読み返せ！」

「いや、私、日本国憲法なんて知らないから」

「なんだとこの非国民！ お前なんか、日本国民の風上にもおけん！」

「いやいや、私、日本国民じゃないし」

「たとえそうだとしても、平和を愛するのはこの世界に生きる者として当然の事だろう！」

「いやいやいや、私、この世界の生き物じゃないし」

「だからって平和を冒瀆して良いと思ってるのか！ お前には人間としての心があるのかよ！」

「いやいやいやいや、私、魔王ですから」

沈黙。

そういえば、そうでした。人間じゃないんですね、貴方様は。

「だいたい、平和を冒瀆しないでどうやって世界征服するのよ」

そういえば、そうでした。世界征服するんですね、貴方様は。

「それに、アンタだって、私の悪行の片棒を担ぐんだからね」

一旦そこで言葉を切り、彼女はにこやかに微笑んだ。

「そこんこよ・ろ・し・く。『平和を愛する日本国民』さん」

拝啓、お父さんとお母さんへ。ごめんなさい。あなた方の息子は、非道の道へと進んでしまいます。この親不孝者の僕を、どうかお許し下さい。俺は地面に手につき、号泣した。そんな俺を、彼女は嬉しそうに眺めていた。ふざけんな、このドS女。でも、ちょっと気持ちよかったりするのには絶対認めないぞ。

「まったく、アンタが帰るのが遅いから、もうこんな時間になっちゃったじゃない」

「悪い悪い、学校の方で、外せない話し合いがあつたんだよ」

彼女はたいそう御立腹である。なにせ晩ご飯を済ませると、時刻は既に8時を越えてしまったからだ。ちなみに彼女に言わせれば、時間の流れはこつちと向こうで、違いは感じられないという。

「うーん、これじゃ、向こうにあまり長居出来ないわね」

「いや、それは心配ない。この世界では7日間のうち原則2日が休みなんだけど、明日からその2日間の連休が始まる。だから、無理に日帰りしなくても大丈夫だ」

彼女はおそらく一週間を知らないだろうから、俺はかなりまどろっこしく喋った。

「ねえ、まだ準備出来ないの？」

彼女がイライラを隠せない様子で、居間から叫んできた。両腕は組んであり、右足で貧乏ゆすりしている。ちょっと、マナー悪いですよ、お嬢さん。

「もう少し待ってくれ！」

俺はキッチンから大声で言い返すと、自分のリュックサックに非常用のブツなどを急いで詰め込んでいく。まったく、備えあれば憂

い無しって知らんのか、あの暴力女は。

俺の準備が出来た頃には、腕時計は既に9時半を指していた。予定が、かなり狂ってしまったな。

「それじゃ、良いわね？」

彼女の言葉に、俺は頷く。すると、いきなり彼女は左手で俺の右手を掴んできた。ちよっと！ これはもしかして、もしかするのでは！ つ、つまりだな。彼女はいざ自分の世界に戻るとなると不安を感じ、心を寄せている俺に癒しを求めて…………。

「アンタを向こうに連れていくには、こうしなきゃいけないからよ」

俺の緩んだ顔つきが気に食わなかったのか、彼女はぶっきらぼうに言う。へいへい、そうですか。でも構わないもんね。女の子と手を繋いでるもんね！ ああ、しあわせえ。

幸福に酔っている俺の姿を気持ち悪そうに見た後、彼女は胸の前に突き出した右手に目線を集中させ、真剣な顔つきになった。

「忠告しておくけど、絶対に私の手を離すんじゃないわよ」

愛の告白ですか！ それは！

彼女は詠唱を始めた。その言葉はあまりにも口に出されるのが速すぎて、俺には聞き取れない。やがて、俺と彼女を中心に灰色の線が引かれ始め、それは五亡星となった。召還のときと同じだ。ただ一つ違うのは、召還の際は茶色の色彩であったのに対し、今回は違う色であった、ということだけだ。

彼女の詠唱が進むに連れて、俺と彼女の姿が、どんどん透明になっていく。左手を見ると、床のカーペットの模様が、透けて見えた。その度合いは、だんだんと強くなっていく。そして俺の手が完全に見えなくなつた瞬間、俺は『俺の世界から消える』という感覚を初めて味わつた。

はじめてのいせかい

次の瞬間俺は、なんだか不思議な空間を、猛スピードで突っ切っている彼女に『しがみついて』いた。つまり何が言いたいのかという、もの凄い速度で移動しているのは俺じゃなくて彼女なわけで、俺は言うなれば『鷹になつて風を切り空を駆け抜ける爽やかな感覚』ではなく、『高速で運行している新幹線の半開き窓に外から必死でしがみつく恐怖の感覚』を味わっているのである。まあそんな状況に突然陥ってしまうと、叫んでしまいたくのが人間なわけで。

「みのりさあああああん！　好きだああああああ！」

絶叫しました。

「アンタ、何言ってるのよ！」

いつの間にか彼女は俺を振り返り、足が沢山ある虫でも見ているかのような目で俺を見る。

「引かないでくれ！　頼むから！」

「無理に決まってるでしょ！　気持ち悪い！」

「気持ち悪いとはなんだ！　俺は美野里さんへの誠実な愛をだな！」

「既婚者でしょうが！」

「人妻を好きになって何が悪い！」

「倫理的に問題があるのよ！」

「魔王が倫理なんて気にするのかよ！」

「世界征服と恋愛は別次元なの！」

高速で飛びながらの口喧嘩。我ながら器用だと思うが、こうでもしなきゃ正直、恐怖を隠せない自分がいる。彼女は言及しなかったが、おそらくここで彼女の手を話してしまうと、俺は死んでしまうか、それとも見知らぬ別世界に取り残されてしまうに違いない。俺は必死で彼女の手を握り締めていた。

この空間は様々な色が、まるで沢山の絵の具をかき混ぜたパレットの上のように、複雑に絡み合っている。けれど、なにしろ特急状態であったから、じっくり見ることは出来なかった。

やがて、俺の握力も限界に近づく。

「俺はここまでのようだ。すまん」

「な、何言ってるのよ！ そんなこと言わないでよ！」

「フィオナ……」

人は極限状態のとき、本音をついポロリと漏らしてしまうものと聞いていたけれど、本当だったようだ。俺は彼女が投げかけてくれ

た言葉に、思わず感動してしまう。いつもはあんなに暴言を吐いてくる彼女だけど、やっぱり俺はのことを憎からず思っていて、心配してくれているんですね。

「アンタが死んじやったら、私がそっちの世界に逃げ込めなくなるじゃない！ アンタが死ぬのは勝手だけど、私まで道連れにしないで！」

前言撤回です。俺は、泣いた。異空間に鼻水をまき散らしながら、泣いた。俺の鼻水は、他の世界へ飛んでいったのだろうか。そのことが何となく心に引かかってしまったが、確かめるすべはなかった。

やがて、俺達の進んでいる方向に、黒く光る、丸い形をした『もや』らしきものが見えてきた。そして俺と彼女は、まるでその正体不明の物体に重力が存在するかのように、それに引き寄せられていく。彼女は冷静だったが、俺はやっぱりパニックっていた。

「おい！ 大丈夫なのかよ！」

「ええ、あの中に入ってしまったえば、もう到着よ」

「このろくでもない航海から、やっと解放されるのか！」

俺は安堵感で胸が一杯になった。しかし、『もや』に吸い込まれると、途端にその感情は消え失せた。

今度は、空を飛ぶ飛行機から、パラシュート無しで落下する気分の到来でした。しかも彼女は自分から、俺の右手を振り抱いました。

「おかああああああん！」

俺は再び、絶叫した。

ドサッ。そんな音がして、俺はひんやりとした地面に叩きつけられた。

「いててて」

痛むお尻を左手でさすりつつ、立ち上がる。俺の視界には、異世界の景色が広がっていた。

さて普通の人は、『剣と魔法、そしてモンスターが出てくる王道RPGで、一番始めに挑むことになるダンジョンはどんなところか？』と聞かれたら、どう答えるだろうか？ 草原、町中、森、洞窟、大抵がそんな風に答えると思う。そしてそのようなダンジョンは、レベル1単独で挑んだとしても楽勝でクリア出来るような、初心者に優しいチュートリアル的な内容であることが多い。出てくるモンスターも弱っちい奴ばかりで、特に特筆すべき仕掛けもなく、道に迷いにくい、親切設計であってしかるべきなのである。2周目のプレイヤーが少しイライラを感じてしまうのは、ご愛嬌というものだ。

間違っても俺の眼前に広がるような、ブリザード吹き荒れる大雪原のど真ん中ではないわけで。ちなみに、冬の日本とは比べ物にならないであろう寒さである。これがRPGであれば、時間と共にHPが減っていく仕掛けが施されていても、不思議でも何でもない。

「なんじゃこりゃあ！」

俺は、すぐ側で平然と立っている彼女に詰め寄る。

「見て分らない？ 雪原だけど」

「それぐらい分かるわ！ こんな寒いところに転移するってことを、どうして先に教えてくれなかったんだ！」

彼女は頬をポリポリとかく。少し申し訳なさそうな表情だ。

「そりゃ、仕方ないじゃない。私だってこんな魔法使うの初めてだったし。それに、ただ詠唱するだけでももの凄い魔力と技量が必要になるのよ？　転移する場所を選べるなんて、私の父ぐらいよ」

まあ、そういう理由があるのなら確かにしようがないと思わざるを得ない。しかしいくら納得したところで、俺の格好が、上は制服のカッターシャツ、下は夏服のスボンという、極めて極寒に弱いタイプのものである状況は変わることがないのである。

俺は、かなり生死に関わる質問をした。

「ここのモンスターって、手強いのか？」

「そうね、私でも少々骨が折れるかも。並の冒険者なら、一歩間違えれば殺されるでしょうね。アンタなんかだったら、フェンリル辺りに出くわしてしまった途端、一瞬で八つ裂きにされるのがオチよ」

「おい、ちょっと待て。フェンリルって、氷系の強力な魔法を使う、強そうな狼のことじゃないよな？」

「ええ、そうよ。よく知ってたわね」

普通のRPGなら、どう考えても中盤から終盤に出てきそうなモンスターだろ、ソイツ。どう好意的に見ても、初心者向けのワールドとは思えません、はい。心なしか、吹雪がいつそう激しく吹いてきた気がした。

こうして、俺の異世界大冒険が幕を開けた。もともと、俺の思い描いていた想像とは、初っぱなから何か間違っている始まりだったけれども。

寒くて迷ってさあ大変

さて、異世界へと無事に転移出来た俺達ではあったのだが、いかんせん時間と場所が悪かった。時刻は夜で、辺りは一面、雪景色。気温はもちろん、マイナスである。どこにでもいる日本人高校生の俺が、このようにイレギュラーな環境に適応出来るはずもなく。腕を組み、寒さに身を震わせているのであった。

「さぶい……って、なんでお前はそんなに平気そうにしてるんだよ！」

俺が凍え死にそうだというのに、彼女は寒がるそぶりを微塵も見せず、ニコニコと雪を両手で丸めている。そう、例えるなら、雪合戦で投げる球を作っているような感じた。なんだか懐かしさを感じる。小学校の頃、よく学級対抗雪合戦戦争したっけ。相手クラスの人間を、ピクリともしなくなるまで集中して攻撃したり、生きたまま雪ダルマにしてやったり、色々やったなあ。巨大かまくらに逃げ込んでいた敵部隊を、かまぐらの天井を破壊して生き埋めにしたこともあったっけ。そういえば白山ユリは毎回、まるで鬼神のような強さだったな。確か五年生のときは、六年生のクラスを単独で壊滅状態まで追い込んでたし。確かアイツ野球してたから、すんごく当てるのが上手だったんだよなあ。

「えい」

そうそう、そんな感じで投げてたよ、うん。

フィオナがまるで現役ピッチャーのように美しいフォームから放った一球は、俺の腹に鈍い音を立てて直撃した。ナイスコントロールです。

「ぐはっ！」

俺は腹がへこんだときに思わず口から飛び出してくる言葉を吐き出して、地面に崩れ落ちた。

「おい、フィオナ。お前、何を……………」

味方に裏切られたときに言いそうな台詞を、俺は言った。ちなみにこの後の会話で『ごめんなさい。でもこうしなきゃ、私の大切な人が死んでしまうの』みたいな事を言う女性は大抵美人で、俺の好みだったりする。死亡率高めなのがけっこう悲しい。

「あ、ごめん。軽く当てるつもりだったんだけど」

彼女は両手を胸の前で合わせて、バツが悪そうに謝罪した。謝って済むと思ってんのか、死んだらどうする！ 大声で怒鳴ってやろうと思ったが、寒さと痛みのため、かすれ声しか出せなかった。

「どこが軽くだよ。思いっきし直撃させてんじゃないか」

「右肩らへんを狙ったつもりだったのよ。まさか腹に当たっちゃうなんて思ってたし」

彼女は心底申し訳ない、といった顔をする。反省しているのなら、

別に怒る必要もない。俺だって散々やらかしているし。俺は出来るだけ優しく声をかけた。

「もういいよ。俺はここまで寒いとこ慣れてないからさ、さっきは上手く反応しきれなかっただけだ。気にすんな」

彼女の表情が、少し和らぐ。

「私、雪を見てるとついつい投げたくなっちゃうのよね。昔よく城の友達や召使い達と、雪合戦してたものだから」

なんだと、まさかコイツも雪合戦狂なのか！

その頃を思い返しているようで、彼女は懐かしそうに微笑んだ。

「みんな手加減無しの真剣勝負だったから、いつも庭が銀色から紅色に染まっちゃって、父によく叱られてたわ」

ただでさえ寒いのに、背筋に悪寒が走った。今度雪合戦をするときは、絶対に彼女と白山ユリだけは呼ばないでおこう。俺はかたくなに誓った。

あの後、俺達はまず最寄りの町へ向かうということで意見一致し、この土地に何回か来たことのあるという彼女に道を一任して、雪景色の中を歩き始めた。

俺は先ほど聞きそびれた問いを、もう一度彼女に訊ねる。

「ああ、そのことね」

コレのおかげなのよ、と彼女は自身の着ている服を指し示す。それは、俺が彼女と出会ったときに着ていた服でもあった。

「この服は父が16歳になった私への誕生日プレゼントとして、魔族の中でも有名な服職人に特注で作らせた物なのよ。この服にこめられた魔力のおかげで、私は外界の冷氣や熱気を、和らげることが出来るの」

それで貴方はまったく寒さを感じていないってわけですね。俺は鼻水たらたらでブルブル震えながら歩いているっていうのに。くそっ、うらやましい。それにしても、魔族の服屋さんって、想像もつかないぞ。頭に角の生えている怖い目つきの化け物が『いらっしやいませ、こういった服をお探ですか?』と客に訊ねたりしているのだろうか。ちょっと見てみたい気もする。

そんなこんなで、1時間近く歩き回っていたのだが、一向に町は見つかる気配が無い。

「おいフィオナ、本当に町の場所が分かってるのか。ぜんぜん見えてこないぞ」

俺が疲労感から言うと、彼女は顔を真っ赤にして振り向いた。

「うるさいわね！ 真剣に探してるんだから、邪魔しないでよ！」

すごい形相で怒鳴られたので、俺は口をつぐみ、黙って彼女に付いていくことにする。だって目が怖かったもん。

更に1時間が経過。未だに町は視界に入らない。

ひょっとして。俺は思った。フィオナって、実は方向音痴なんじゃないだろうか。

後ろから少し近づいて、彼女の顔を伺う。イライラしているようで、しきりに歯ぎしりをしている。うーん、どうも意地になっているようです。しかし、困った。正直、俺はもう体力の限界だ。体はすっかり冷えきってしまっている。瞼だって重い。このままずっと過ごしていたら、俺はきっと凍死してしまうだろう。いや、冗談抜きで。

どんな物も命には代えられない。彼女に、一度俺の家へ戻るように説得しよう。そう思って口を開きかけたときだった。

目の前に降りつもった雪の大地から、巨大な怪物が姿を現した。

無慈悲なる弾丸

『それ』は標準的な二階建て住宅程度の大きさをしていた。足は短い、腕は大黒柱のように太くて長い。獣のような顔は無機質で不気味な感じた。

「それにしても、体中雪だらけだな」

雪が怪物にまわりついていて、本来の形がまるで分からない。雪の中にずっと埋まっていたからだろうか。

「違うわ。アレは雪で出来ているのよ」

俺は彼女の言葉に、驚いた。

「雪が意志を持って動いているっていうのか？」

「正確にいえば『意志を与えられた』というべきね。無機物を一定の形に固定した後、命を与えて自由に動き回れるようにする一種の兵器よ。術者の命令通りに動いただの人形だから、動きは鈍いけどね」

「あれか、人形使いが操る、人形みたいなものか？」

「ちょっと違う気もするけど、だいたい合ってるわ。このタイプの化け物は『ゴーレム』って言うのよ。普通のゴーレムは人形だけど、アレは雪で出来てるから『スノーゴーレム』ね」

なるほど、言われてみればゲームに出てくるゴーレムに似ている。

歩き方とか特に。

「なるほど、勉強になる。しかしだな、フィオナ」

「何よ」

俺は、俺達に向かったのそのそとやってくるスノーゴーレムさんを指さした。めちゃくちゃコツチ見てますよ。

「アイツ、もしかしてお前を狙ってるんじゃないか？」

「多分ね。大方、ガルザークの部下からの差し金でしょ」

吐き捨てるように、彼女は言った。

「だったらさ、早いとこ逃げた方が良いんじゃないか？」

「うーん、それもそうなんだけど」

彼女は額にしわを寄せる。

「コイツの頭に張り付いてる羊皮紙が主人のところに渡っちゃったら、私がこの世界に来てるってことがバレバレになっちゃうのよ」

「つまり、今のうちに倒しておいた方が得策ってことか？」

彼女は頷いた。

「そういうこと。それじゃあ私が倒すから、アンタは怪我しないように下がってて」

そう言い残すと、彼女はスノーゴーレムに向かって、駆けだしていった。俺は彼女の言いつけどうりにスノーゴーレムから離れる。ただし、目線は外さないままだ。

スノーゴーレムは彼女が近づいてきても、顔色一つ変えなかった。しかし無表情のまま、口から大きな雪の塊を飛ばす。

それを彼女は軽やかに避けると呪文を唱え、掲げた右手の上に、青白い炎を出した。昨日の晩、彼女が俺に見せた物と、まったく一緒だ。

「食らえ！」

彼女はそう叫ぶと、大きく手を降り下ろす。炎はスノーゴーレムめがけて飛んでいき、その右手に当たった。たちまち炎はジュツと音を立てて消え去ったが、奴の右手も同時に溶けて小さくなった。まあ雪で出来てるんだし、火には弱いよな。俺は雪が液体へと変わっていく光景を眺めながら、勝利を確信した。

だが俺の予想と裏腹に、そう簡単に奴は消えて無くならなかった。俺は次の瞬間、驚愕した。

「嘘だろ！？」

スノーゴーレムは雪の地面と接している箇所から雪を吸い上げて、

自らの右手を少しずつ再生していく。そして空いている左手を使い、彼女めがけてパンチを繰り出した。いくら雪で出来てるとはいえ、あの重量で殴られたなら、並の人間はおそらく死んでしまうだろう。

しかし、どうやら彼女はその反撃を既に読んでいたらしい。素早く後ろに下がったので、奴の拳は目標に当たることがなかった。

「そこっ！」

彼女は続いて、同じ炎で今度は左腕を攻撃した。右腕と同じように溶けていく左腕。そして、今度は両腕が再生を待つ状態になった。これでは自慢の腕は使えない。彼女は勢いよくスノーゴーレムに走り出す。奴は口から先ほど見せた雪の塊を何度も何度も放ち続けるが、彼女はなんなくそれらを避けて距離を詰めていく。

「これで……………」

大きくジャンプして、スノーゴーレムの口の中めがけて、炎を叩き込む。

「終わりよー！」

スノーゴーレムの体が溶けて崩れ落ちる。そして、俺は奴の中心部であろう胴体の中に、埋め込まれている1枚の羊皮紙を見つけた。彼女はそれを、勢いよく抜き取る。その瞬間、奴の体は自身を再生することをやめて、ただの雪の塊となって地面に音を立てて落ちていった。

アイツ、本当に強いんだな。

俺は彼女に賞賛の言葉を送るため、彼女のところへ歩きだそうとした。

そのとき、俺のすぐ後ろの地面が、盛り上がった。

「なっ………!?!」

俺が驚いている間にも『2体目』のスノーゴーレムはその姿を現していく。

「コウジ！ 逃げて！」

後ろからフィオナの声と、雪を踏みつける音が聞こえる。きっと、急いで俺の元へ駆けつけようとしているのだろう。炎が燃え上がる音が聞こえた。

しかし余りにも、ソイツと俺の距離が近すぎた。背を向けて逃げ出す時間すら無かった。ソイツはまだ上半身しか雪の中から姿を見せていなかった。両腕はその半分以上が雪の地面に埋もれていた。それでも俺を攻撃するには十分過ぎた。

ソイツは口から雪の塊を発射した。彼女のように素早く回避することの出来なかった俺は、その攻撃をまともに食う。腹が、雪の重みとそのスピードによって潰される。フィオナの雪球が当たったときは、まだ声を発して倒れることが出来た。彼女の、本気で俺を苦しめようとはしなかった気持ちだが、それを許した。けれどこの雪塊は、そのささやかな行為ですら、許さない。

ただ、人に苦痛を与えるためだけに撃ち込まれた弾丸。

声に出せない悲鳴を上げながら、俺は意識を失った。

ようやくの到着

うかつだった。ゴーレムが集団行動を得意としないという先入観から、敵は1体だけだと勝手に思いこんでいた。

彼の手前、強がってみたけれど、私はまともにモンスターと戦ったことなど数えるほどしかなかったのだ。師匠と呼べる魔族から一通りの戦闘技術は教えてもらった。一般のモンスターと戦うときのための訓練、勉強は一日たりとも欠かしたことはなかった。しかし、練習では拾得出来ない物もあるのだ。そういった物の不足が、この結果を引き起こしたのだろう。

コウジは必死で走る私の眼前で、ドサリと崩れ落ちた。

「消え失せるお！」

怒りに任せて、私は『2体目』の胸元めがけて『青き炎』を放つ。奴は腕を使えない状態だったからその攻撃を防御することが出来ず、中心部を熱でやられたために姿勢を維持できなくなり、倒れた。しかし再生は行われている。私は急いで奴の胸元へ飛び込むと、羊皮紙を引き抜く。途端に奴は1体目と同じ末路を辿った。私は奴がただの雪に戻ってしまったのを確認してから、倒れている彼の元へ駆け寄った。

「コウジ、大丈夫？」

返事はないけれど、呼吸はしているので生きてはいるようだ。た。おそらく、気絶しているのだろう。しかし、このままでは危ない。2体も出くわしたのだ。近くに他のスノーゴーレムがいるかもしれない。早く、ここから逃げないと。

彼を運びながら道を探していたら、敵に襲われたときに応戦出来ない。ここはアイツに手伝わせよう。そう思って、私は召喚を行い、唯一呼び出すことの出来る配下を呼び出した。茶色の魔法陣が輝き、1体のゴブリンが姿を現す。

「お嬢様、どうしたんですかい？」

「ルグーグ、彼を運んで」

「へい、分かりやした。どちらまで？」

ルグーグは倒れているコウジを軽々と自身の肩にかつぐ。ゴブリンは下級の魔物とはいえ、力だけはある。

「どこかの町まで。……とはいつても、道に迷ってるんだけどね」

私は深いため息をつく。だが次の瞬間、ルグーグは驚くべき言葉を口にした。

「どうしてあつしを呼んでくれなかったんですかい？ 呼んでくれたら、あつしがしっかり道案内差し上げたのに」

「え、この辺りに来たことがあるの？」

「ええ、生前にこの地方で商売をしてたもんですから」

なんだ、最初からルグーグを呼んでいれば、こんなに苦勞することもなかったんじゃない。私は少し脱力した。

私はルグーグに道案内を任せて、その後ろに付いていった。彼は私達が歩いてきた道を、戻っている。道中、何回か別のスノーゴレムや野生の魔物に出くわしたが、私がそいつらの相手をした。その間、私は今までの経緯について、ルグーグに説明した。彼は真剣な表情で、私の話に聞き入っていた。

30分程度の時間で、私達は町にたどり着いた。

「着きましたぜ、お嬢様。ここがノーシスの町です」

「意外に近くにあったのね……」

すると、私は器用にこの場所を避けて歩いていったってことなのかしら。

町に入る前に、私はコウジから受け取ったものを、頭に被った。

「お嬢様、一体それはなんですかい？」

ルグーグは呆気に取られた顔で、私を見つめている。

「ああ、コレ？ コウジが『お前は狙われているから、素顔を隠した方がいい』ってことでくれたの」

私も被りたくはなかったけれど、これを着けていれば、まず私とは分からないだろう。

「そ、そうですかい」

彼はそう言つて口をつぐんだ。彼を町中へは連れていけないので、私はいったん彼の召喚を解き、コウジを背中におぶった。けっこう重い。

町に入ると、すれ違う人々が私をジロジロと見つめてくる。このお面のせいだろうか。注目を浴びるのは恥ずかしいが、背に腹は変えられない。取りあえず、私が魔族の娘であるということは、バレてないようだ。

私は町の外れにあつた少しボロい宿屋に入る。女将さんは私を見て目を丸くしたが、すぐに営業スマイルへと表情を変えた。

「いらっしやいませ、宿泊の方ですか？」

「はい、私と彼の2名です」

「彼は具合が悪いのですか？　もし必要なら医者呼びますが……」

「いや、寝てるだけなので大丈夫です」

「分かりました。相部屋でよろしいですか？」

一瞬、嫌な予感が頭をかすめる。けどまあ、流石にコイツにも分別というものはあるだろう。そんな元氣も今はないだろうし。私は女将の言葉に頷いた。

「はい、構いません」

「それでは、こちらへどうぞ」

女将に促されて、私は部屋へと案内された。そして彼を布団に寝かせると、スノーゴーレムから奪い取った羊皮紙を、じっくりと眺めた。

夢、謝罪、記憶、爪

俺は真つ暗な空間にいた。目に映るのは漆黒の闇ばかりで、ここがどのような場所なのかは見当もつかない。けれど、自分の体が宙に浮いていることは分かった。というのも、足が地面に重力を預けている感覚がなかったからだ。

無重力ということは、ここは宇宙空間なのだろうか。おかしいことに俺の心を支配していたのは、得体の知れない闇に包まれている恐怖ではなく、むしろ安らぎだった。

気持ちいい。

宇宙という母なる存在に体中を抱かれているという、安心感。フワフワと、何にも縛られずに浮遊している事が、何とも言えないくらい心地よかった。

ぴたつ。

不意に、両頬に温かい何かが当てられた。この空間をてつきり独占しているものと思った俺は、心臓が飛び上がるのを感じた。しかし絹のように滑らかな肌触りと、感触から想像される形状から、俺がその得体のしれない物体が『女の手のひら』だと気づくのに、そう長い時間はかからなかった。

やがて動揺は陶酔へと変わる。いつの間にか俺の鼻孔を、女性特有の甘美な匂いがくすぐり、脳内に快樂物質が作り出される。すぐ目の前にいるはずの『女』の息づかいが聞こえてきて、その事が俺の中にある野生的衝動を煮えたぎらせる。この女を力の限り抱きしめてしまいたい。しかし意志に反して、俺の体は動かなかった。押

さえきれない欲望を満たす事の出来ないもどかしさに、俺は軽く発狂してしまいそうになる。やがて、女は口が開いた。優しく、喜びに満ちあふれた声色だった。そして、遠い記憶の片隅に確かに存在する、決して忘れることの出来ない、聞き覚えのある声だった。

――お兄ちゃん。

急激に体が冷えきっていくのを感じた。快楽は消え失せ、代わりに顔を覗かせた動揺、恐怖、渴望、そして後悔の念が、我先にと俺を押しつぶそうとする。

体は動かないはずなのに、俺は絶叫した。

目が覚めて、飛び起きる。現実の俺は畳の上にしかれた清潔な布団の中にいた。普段の俺であれば羽毛布団特有の柔らかい感触を心地いいと感じるのだろうが、体中にまとわりつくような冷や汗のせいで、とてもそんな気分にはなれなかった。先ほどの悪夢の残照が、脳裏によぎる。俺は右手を額に当てた。

いきなり俺が大声を出したために、まあ当然の反応ではあるが、フィオナは眺めていた羊皮紙から顔を上げて、俺の方を向いた。そして俺の顔を見ると、心配そうな顔つきで訊ねてくる。

「ど、どうしたのよ。汗びっしょりで、顔色も真っ青よ」

俺は精一杯の笑顔を作って、出来るだけ平静な声を出すのを心かけた。

「いや、夢の中でさ、砂浜にうつ伏せで寝そべってる、ビキニ姿でスタイル抜群の金髪美女を見かけたんだよ。それで『サンオイル塗りがあいつこしませんか？』って聞いたら顔を上げたんだけど、それがオランウータンの顔だったわけ。あまりにも怖いから走って逃げ出したらそのオランウータン顔の女性が胸をプルンプルン揺らしながら追いかけてきてさ、参ったよ」

彼女は俺の話聞き終わった後、不審そうに俺のことを見つめていたが、やがて視線を逸らした。

「まあ、いいわ。取りあえず気が付いて一安心よ」

彼女の言葉を聞いて、俺は今まで眠っていた理由を思い出す。そ

の瞬間、俺の腹から激痛が走り、俺は顔をしかめた。それと同時に、この日本じみた和風風味の部屋が、俺の世界に存在するものではなく、彼女の世界世界に存在するものであることにも気が付いた。

「いてて………」

「まだ安静にしてなきゃ駄目よ」

そう言つて、彼女は俺の肩を掴んでさっきの状態に戻した。

「まったく、骨が折れててもおかしくないのに、痛みだけでピンピンしてるなんて、アンタ本当に丈夫なのね」

彼女は不思議そうな顔で、俺を眺める。

「まあ、腹を殴られるのは慣れてるからな」

学校の女子からはしょっちゅうボコボコにされるし。

「どうせ女性にちょっかい出したせいなんですよ」

「げ、どうして分かったんだ」

「なんとなくよ」

そう言つと、彼女は急に表情を変えた。

「いめんなさいね」

「は？」

何の事を言ってるのだろうか。今の俺はきっと、呆気に取られた表情をしているだろう。

「何の話だ？」

言いくそうに、彼女は布団で隠れた俺のお腹の辺りを見て、話し始めた。

「えーっと、私がしっかりしていれば、アンタはこんな痛い思いをすることもなかったから」

「なんだ、そんなことかよ」

え、と呟くように言って、彼女は俺の顔に視線を戻す。

「別に気にしてねえって。俺がひ弱だったから、一発食らってダウンしてしまっただけだ。心配するな」

「……………ありがとう」

彼女は弱々しく微笑む。

「父も母も、私を命がけで助けてくれたのに、私は何も出来なかった。今度はアンタのこと、守ってやれなかった。情けないよね、私」

自己嫌悪から紡がれた言葉が、彼女の意図を外れて、俺に突き刺さっていく。

『助けてくれた』

『何も出来なかった』

『守ってやれなかった』

甦る。遠い日の夏の記憶。雨。空を掴んだ手。

俺は頭を横に振った。彼女の落胆を取りのぞくためでもあったし、自身の脳内にある残照を振り切るためでもあった。

「だから、気にしてないって。お前は精一杯、俺を助けようとしてくれただろ？　どんなに力を尽くして頑張ってみても、結果が出ないことはあるさ」

俺の口から優しく発せられる言葉は、彼女を慰めるためのものだろうか、それとも自己を正当化させるためのものだろうか。俺には判断出来なかった。

そんな俺の心境を知らないで、彼女は潤んだ目をして言った。

「うん………ありがとう」

布団に隠されていた俺の拳はどちらも、かたく握りしめられていた。硬い爪が、柔らかい肉にくいこんでいた。まるで俺のことを、激しく非難しているかのよう。

和食とお買い得ボックス

「具合はよくなりましたか？」

女将は部屋に入ってくると、俺の前に膳を置きながら訊ねてきた。膳というのは、ドラマや映画などで旅館の宴会シーンが映るとき、食事が上に乗っているアレのことである。

ちなみに女将の言うことが分かるのは、事前にフィオナが俺に『言語複製の魔法』でこの世界の共通語を覚えさせたからだ。

「ええ、大分よくなりましたよ」

俺が返事を返すと、女将はニツコリと笑った。うーん、美人である。

「そうですか、それは良かったです。しっかり食べて、しっかり治してくださいね」

フィオナの分の膳を彼女の前に置くと、女将は一礼して出ていった。女将がいなくなったので、俺はフィオナにさっきから抱いていた質問をすることにした。

「おい、フィオナ。1ついいか」

「何よ」

俺は目の前に並べられた料理の数々に視線をやる。

「なんで、こつちの世界に日本料理があるんだ？」

「ご飯、子持ちししゃも、目玉焼き、きゅうりの酢のもの、ほうれん草のゴマ和え、たくあん、極めつけは豆腐と野菜のたっぷり入った味噌汁。厳密には日本固有とはいえない料理も混じってはいるが、俺にとっては紛れもない日本の食卓そのものだった。ていうか、この家屋自体まんま日本製じゃねえか。どう見ても旅館だろ、ここ。」

「この宿の主人は『ヤマト地方』っていう個性が豊かな所の出身なの。これはその地方の文化を模した建物で、料理もその土地のものよ。こういう情緒溢れる宿屋って、けっこう儲かるらしいのよね。だからアンタの世界とは全然関係ないわよ、絶対。確かに私も、なんだか似てるな、とは思っただけ。」

「………なんだか地方名が、他人の空似とは思えないくらいなんですけど。」

しかし、俺はなんだかんだ考えながらも、彼女の説明に納得してたりする。まあ、異世界があるってことに比べたら、インパクトは小さいしね。モンスターの名前が共通してたりするんだし。俺の常識という奴も、環境って奴に適応したってことだろう。多分。

「まさしく、『事実』は小説より奇なり」だな」

思わず、ポツンと呟いていた。

「ところでさ」

俺はご飯を口に運びながら言った。柔らかいお米を口一杯に頬張り、そして飲み込むと、続きを話し始める。

「これからどうするんだ？ それにこの世界の地理がさっぱり分からないから、ここがどんな所か教えてほしいんだが」

「ここは『ノースの町』よ。父の支配下においてた地方より、けっこう遠いわね」

「そうなのか。ならけっこう安全な所なんだな」

そこまで言うてから、俺の頭に一つの疑問が浮かんだ。

「あれ？ でもスノーゴーレムがお前のことを狙ってたじゃないか」

「きつとこの辺りに、ガルザークと親交があつて、一勢力を築いている魔族でもいるんですよ。私は今までほとんどの時間を父の領土内で過ごしたから、外の情勢には疎いのよね」

「待てよ？ ということは彼女は……………」

「お前、自分がどこにいるか分からないのに歩き回ってたのか？」

「地図上じゃ見たことあったから、大丈夫だと思ったのよ」

そりゃ、迷うわけだよ。

「おいおい、ちょっとその理屈はおかしいって。俺だって日本地図では東京も青森も見ただことあるけど、東京から青森まで目印無しで、しかも徒歩で行くなんて絶対無理だし」

「私、トーキョーもアオモリも知らないんだけど」

「そりゃそうだけでもさ」

彼女は味噌汁を吸うのを止め、俺を見た。

「異世界人のアンタに任せるよりは確実にしょ」

「そりゃそうでした」

俺は即答した。

朝食を食べ終え、出発の準備を終えると、俺達は宿屋を出た。勘

定を払う際、彼女の持つ財布を初めて見たのだが、金貨や銀貨がギッシリ詰まっていた。流石魔王の娘である。あ、もう魔王なんだっけ。世界征服目指してるし。

ちなみに女将さんは旅立つ俺達に、手作りの握り飯を持たせてくれた。俺は異世界人の素朴な優しさに感動の涙を流しつつ、手を振って彼らと別れたのだった。

「オーバー過ぎよ。恥ずかしい」

そんな俺を、どこかの暴力女が馬鹿にした。まったく、アイツには心というのが無いのだろうか。

今、俺達は町で旅の必需品を調達している最中である。フィオナがこの世界のお金を沢山持っているので、こっちの世界で買った方が俺の財布にも優しいのである。

「なあ、フィオナ」

俺はポーション8本入りのお買い得ボックスを買い物カゴに入れながら言った。何故ポーションを買っているかといえば、ゲームで

お馴染みの製品なので、現物を一度飲んでみたかったからである。ほら、アレだよ。飲むと体力が回復するって奴だよ！　ちなみに宣伝文句は『旅のお供にこれ1本！　アナタの疲労を吹き飛ばします！　ニンニクエキス500ml配合』とある。なんだか似たような謳い文句、テレビのCMでやってたような、やってなかったような「何よ」

フィオナは何やら、赤色だったり、黄色だったりする石の入っているビンを買っていた。宝石のように光っていない、純粹に色がついているだけの石である。袋詰めのもあるが、ビンの方がお買い得らしい。何に使うのだろうか。

「思ってたんだけどさ、このまま町を出ても、また昨日みたいに迷ってしまうんじゃないか？」

周りは雪と、寒さに負けずに立ち続けている大木くらいしかない。この土地に詳しい者でもないとい、同じことの二の舞になるだろう。すると彼女は意外な答えを発した。

「大丈夫、その件だったら心配ないわ。道案内する奴が見つかったのよ」

「そうなのか、ならいいや」

俺の寝てる間に探したのだろうか。まあ、それなら心配ないな。綺麗なお姉さんだといいいけど。

道案内をしてくれる人に思いを馳せながら、俺は買い物続けた。

その顔で怒られても

その恐ろしい事件は、俺と彼女が手分けして買い物をした後、町中の広場で合流した際に発覚した。

「なんだよ、コレ……」

俺は愕然として苦言を漏らす。食料担当係の彼女がわざわざ自腹で買ったその上は食べ物の山、山、山なのであるが、その『量』が問題なわけではない。かといって『質』というわけでもない。問題は『中身』である。食べ物が種類しかないのだ。

俺は『食べ物は私が買ってくるから』と言い残して、食品市場へと走った彼女に質問した。なぜ聡明な魔王である貴方が、このような凶行に走ってしまったのかを。

「おい、フィオナ。どうしてお前が買ってきた食物はビスケットだけなんだ。もしかしてお前、ビスケットフェチなのか」

「人聞きが悪いわね。私はアンタみたいな変態じゃないわよ」

「お褒めの言葉をありがとう。しかしお前がやったことは、誰が見ても異常者の行動だぞ」

「まったく。アンタは本当に馬鹿ねえ」

彼女は深いため息をつく。

「今から私達は高く険しい山を登るのよ？ 保存の聞く食料を持ち

込むのは当然の選択でしょ」

「だからって、なんでビスケットだけなんだよ。クッキーとか飴玉とか、保存が効く菓子なんて一杯あるだろ」

「昔、まだ幼かった頃に父から聞いたのよ。雪山で遭難した旅人が、一週間も救助が来るまで残っていたビスケットのおかげで命を繋いだって話」

「それはその時、『食べれるものがビスケットしか無くてやむを得ず』ってことだろうが」

「確かにそうだけど、この話からビスケットが遭難した際に有効だって、証明されてるじゃない。それに、別に味が一緒ってわけじゃないし」

「……まあ、そうだけど」

確かにその中に、いろんなブランドのビスケットがあって、多種多様のバリエーションが存在するのは認めよう。しかしだな、ビスケットにイチゴ味だったり、バナナ味だったり、醤油味だったり、あるもんなのだろうか。俺はこの世界で初めて見たぞ。それになんというか、不安があるというか、登山中のオチが見えるというか。

「それに、買ったものは仕方ないでしょ」

そう言われれば、確かに仕方がない。

「まあな。元々、お前の金なんだし」

もしかするとフィオナは聡明というより、世間知らずのお嬢様なのかもしれない、俺は心の中でふと、そう思った。

「そんなことより、服屋に行きましょう」

彼女はいきなり話題を変えた。

「なんだ、ようやくその目立つ服装をやめるのか？」

フィオナの服は、彼女の父特注の一品であり、もちろん魔王らしい外観である。ただでさえ人目を引くような格好であるのに、彼女の美しい容姿とあまりにもミスマッチ過ぎるので、目線が彼女に集中することこの上ないのだ。

「違うわよ」

彼女は俺の予想を遙かに上回る返答を返した。どんだけ遙かかというと、月を通り越して木星までたどり着くくらいだ。

「アンタに服を買ってやらないと」

一瞬、俺は耳を疑った。

「な、何をするって?」

彼女は今度は少し大きい声で言った。

「アンタにコートを買ってやるって言ってるの!」

俺は絶句した。そして感激のあまり、目から涙がほとばしるのを感じる。

俺の様子を見て、彼女は慌てふためいた。

「ちょ、ちよっと。何泣いてんのよ」

俺は鼻水をすすりながら答える。

「だって……まさか……あの……俺をいつも虐める暴力女が……俺に新しい服を買ってくれるなんて」

「暴力は余計よ」

彼女は怒ったようにそう言って、俺に右手人差し指を向ける。心なしか、顔は少し赤い。

「その格好じゃ、風邪とか引いちゃうかもしれないでしょ。登山の途中で倒れたりされたらシャレにならないのよ。だからそうならないように、初めから手を打つわけ。勘違いしないでよ、気持ち悪い」

そこまで一気に言い終えると、彼女はそっぽを向いて、フン、と鼻息を鳴らす。分かってますよ、フィオナさん。貴方のその行動が、実は私を心の奥深くで慕っているからのものであると。そうならそうとハッキリ言ってくればいいのに。俺の口がニヤケるのが止まらないぜ。ふふふふふ。

「なんで泣きながらニヤニヤしてんのよ。キモい」

彼女は一步引いてそう言うと、その瞬間、何かを思い出したようだった。

「あ、忘れてた」

彼女は自分のバッグから、とある物を取り出して、顔に被る。

ひょっとこのお面である。

俺はニヤケ顔をパワーアップさせて、更に涙を激しくふりまきながら爆笑した。ちなみに『ひょっとこ』とは、日本の伝統的な、男性タイプのお面である。

「ぎやははははははー！」

彼女はひょつとこの顔のまま、怒った口調で叫んだ。

「何笑ってるのよ！ アンタが言ったんでしょ！ 『お前は狙われているから、素顔を隠した方がいい。これで変装しろ』って！」

確かに言った。それは本当だ。まだ俺の世界にいたときの話である。しかしだな、それはジョークのつもりだったのだよ。まさかまともに受け取って、変装に使う奴がいるとは……。しかも町中で被りやがって！ ゲラゲラゲラ！

「お前馬鹿だろ！ そんなジョーダン本気にするとかありえねえよ！ ヒヒヒヒヒ！ 腹いてえ！」

やがて、彼女の全身がプルプルと震えだした。マズい状況になったのは、俺も察することが出来た。しかし彼女の怒りに燃える表情が見えたらまだしも、いかんせん顔はひょつとこ仮面のままである。真顔になれってという方が無理というものだ。

「アーツハツハツハ！」

彼女は右手を引き、左手を前に出して力を溜めた。

「笑うなっ！」

彼女の懇親の右ストレートは、俺の顔面に直撃した。俺は笑い続けたまま、後方に吹っ飛んだのだった。

その後、俺の全力を尽くした謝罪が実を結び、なんとか俺の防寒コートは買ってもらえた。ただし俺は罰として、それから町にいる間ずっと、ひよっとこお面をつけていたけれども。

グラスラー山脈へ

その後、俺達は町を出発した。昨日と変わらない、果てしなく広がる雪原と、体を襲う冷気を伴った暴風、そして新たに加わった、山ほどのビスケットやその他もろもろの乗ったそりを引くという仕事にげんがりして溜息を漏らす。俺は犬じゃないんだぞ！ もっとも、彼女が買ってくれた黒いコートのおかげで、昨日よりはだいぶ寒さをシャットアウト出来ているが。

「相変わらず、しんどい気候だな」

そのとき、俺は町に猛吹雪が吹き荒れていなかったことに気づいた。フィオナにその事について訊ねてみる。彼女曰く、ノースの町に住んでいる魔術師達が協力して、町に害のある強風などが入ってこないよう、結界を定期的に張り巡らしているらしい。

「老後の魔術師達はそうやって町に貢献することで、一定の地位と金を手に入れるのよ」

彼女の言葉に俺は、何故か国家公務員の天下り問題を頭に思い浮かべた。地域に貢献してる分、こっちの方が数倍偉いとは思っけど。

俺は彼女とこれからのことについて色々話し合いながら、雪原を歩いていたのだが、町を出て数分後、俺は彼女が案内人を頼んでいたことを思い出した。

「そういえばさ、道案内してくれる奴って、どこにいるんだ？」

もし落ち合う場所が町の中だったりしたら、一度引き返さなくちゃならない。そうなると、面倒くさい事必至である。

「ああ、そのことね。もう少し先に進んだら呼ぶから」

彼女はこともなげに言った。俺はその言葉に疑問を覚える。

「呼ぶ？ 町の外に住んでるのか？」

俺の頭の中に、雪男のような巨漢のシルエットが浮かぶ。

「違うわよ。私のゴブリンを召喚するの。最初に私達が出会った夜に見せたアイツ」

「え、人間じゃなかったのか？」

俺は予想外の返答にとまどう。

「私、人間だなんて一言も言ってないけど」

彼女は俺の反応を見て、キョトンとしながら言った。うーん、確かに振り返ると、人間だとは言ってなかった。思いこみって怖いね。

「よし、ここまで来れば町からは見えないうね」

彼女は立ち止まると、呪文を唱え始める。やがて彼女の周りとその前方に、2つの茶色い魔法陣が出現し、いつかのゴブリンが姿を現した。もっとも前回と違ったのは、今回は魔法陣が消失した後も、そのゴブリンは残ったままだったということである。

「お嬢様、今回はどんなご用件で？」

フィオナにそう質問した後、そのゴブリンは俺の方を見た。

「おお、ダンナもすっかり元気になられて」

「え？ あ、ああ」

俺はゴブリンが俺の事を知っている様子だったので、少し戸惑う。そんな俺を見かねたようで、フィオナは説明してくれた。

「コイツの名前はルグーグ。私の召使いみたいなものね。倒れたアタを町まで運んでもらったのよ」

なるほど、そのときに俺を知ったのか。俺はルグーグに自己紹介をする。

「そうだったのか。ルグーグ、ありがとうな。俺は速水コウジっていうんだ。よろしくな」

「いえいえ、気にしないでください。こちらこそよろしく願いします」

ルグーグが右手を差し出して握手を求めてきたので、俺はそれに応じる。どうやらルグーグは外見に反して、紳士的なタイプのだ。

俺とルグーグの握手が終わったのを見計らって、フィオナは彼の質問に答える。

「今回アンタには、グラスラー山脈までを抜けるまでの道案内と、荷物運びを頼みたいの」

「グラスラー山脈……ですかい？」

ルグーグは目を大きく見開く。

「かなり厳しい道のりになりますぜ、お嬢様」

「でもそこを抜けないと、この極寒の地からは抜け出せないわ」

そう、俺達が現在いる『インシス地方』という極寒の地を抜け出し、世界征服の地盤を築きやすい地方に出るには、まず『グラスラー山脈』という険しい山脈を突破しなければならないのである。

ルグーグはしばらくの間腕を組み、目を瞑って思索しちたが、やがて目を開けて言った。

「分かりやした。お嬢さんの命令ですからね。ダンナ、そのヒモを貸してくだせえ。ソリはあつしが引っ張りやす」

「え、いいのかよ。これ、けっこう重いぞ」

「そんなに遠慮しないでくだせえ」

ルグーグは俺の手からヒモを取る。

「さ、出発しましょうぜ。ずっと立ち止まっていたら、冷えてきて動けなくなってしまうやす」

先頭はルグーグで、そりを引っ張っているのにも関わらず、平然と歩き続けている。そしてその後ろに俺、フィオナが続く。最高尾がフィオナなのは、俺が一番後ろだと、後方から襲ってきた魔物に対応することが出来ないからである。つまり、戦力と見なされていないということでもある。トホホ。

道中、俺達はただ無言だった。何故かというと、ルグーグからの注意があつたからである。

「むやみに話していると、口から貴重な体温が逃げてしまいやす。出来るだけ私語は、謹んでくだせえ」

そういうわけで、俺達はただ黙々と、グラスラー山脈に歩を進めるのだった。

幻覚の中の幸せ

「でけー！」

グラスラー山脈のふもとに到着したとき、俺は思わず叫んでいた。だって、山の頂上が見えないんですよ、霧に囲まれて。それに山脈だから、いくつも山が重なってるんですね、終わりが見えません。そりゃ、彼女がこんだけビスケット準備するわけだ。

「ほら、何ボサッと突っ立ってるのよ。サッサと行くわよ」

後ろからフィオナに急かされたので前を見ると、ルグーグは既に山に入り口へ足を踏み入れていた。

腕時計を見ると、俺達がグラスラー山脈に足を踏み入れてから、実に3時間以上が過ぎていた。ずっと歩き続けていたせいか、足が重い。歩く度に足首まで雪の中に埋もれてしまったため、余計に力をつかってしまうのだ。吹き荒れるブリザードも、俺の体温を容赦なく奪っていく。あまりにも寒いので、俺は顔にひよっとこのお面を付けて、顔に冷風が当たるのを防いでいる。外見よりも、まず命が

大事。俺は震えながら、息を切らして歩いている。しかしながら、フィオナもルグーグも、特に息を乱している様子はない。魔族や魔物というのは、どうも人間よりも頑丈に出来ているらしい。フィオナなんて、外見は人間と変わらないのに。

「なあ、休もうぜ」

俺は心底くたびれた声色で、そう提案する。

「ダンナ、この辺りには休めそうな場所はありません。もう少し頑張ってくださいえ」

「もう歩けないの？ 男でしょ、頑張りなさいよ」

二人の返答は、こういうものであった。しかしフィオナ、そういうのは男女差別っていうんだぞ。

もう、限界だ。寒さも疲れも、当の昔に感じなくなっている。腕時計を見る気力さえ、ない。

ああ、もう駄目なのかもしれない。視界に可愛い黒髪ショートカ

ツトの少女が映り始めちゃったよ。こんな寒い山中でスクール水着なんて着て、背伸びしたセクシーポーズかましてるなんて、絶対に現実の風景じゃない。でも、どうせ死ぬんだったら、可愛い女の子を抱きしめて死にたいな。そう思ってた俺は、少女の方へと歩み寄り、その華奢な体を抱きしめる。少女もまた、俺を優しく抱きしめ返してくる。ああ、温かいし、柔らかいし、女の子特有の甘い匂いがする。これで死ぬるなら本望だ。

「アンタ……なんでその雪の塊を抱きしめてるの？」

後ろからフィオナの、少し戸惑った声がする。前を見ると、ルグーグがキョトンとして俺を見ていたが、俺はすぐに視線を少女に戻す。

「雪の塊？ 何を言ってるんだお前は。俺と熱い抱擁を交わしているのは、お前と比べ物にならないくらい可憐な少女なのだよ」

俺は少女のほっぺたに、自分の頭をスリスリした。彼女はくすぐったそうに目を細める。ああ、スベスベして気持ちいいよお。

「は？ アンタ何言って……………」

うるさい奴だ。俺は振り返らずに怒鳴る。

「もう放っておいてくれ！ 俺はこの可愛い女の子と、死ぬまでイチヤイチャし続けるんだ！」

彼女の声が、聞こえなくなった。よしよし、これで邪魔をするものは何もない。ずっとこうしていようね、少女ちゃああん。

「正気に戻りなさいよ！ この変態！」

「ぐはあああ！」

俺はまたもや彼女お得意の右ストレートを左の頬に食らった。心なしか、この前よりも威力がパワーアップしている気がする。おかげで俺は以前よりも凄い速度で、雪山の斜面まで吹っ飛ばされた。

いや、正確にいえば、『斜面と置いていたところに吹っ飛ばされた』といった方が正しい。

俺の体は斜面に積もっていた雪を貫通して、硬い地面の上に尻からダイレクトにぶつかった。もちろん、その衝撃は相当なものである。

り、俺は両手で尻を抱えて悶絶する。

「し、尻が………尻が痛い痛い！！」

すぐにフィオナとルグーグの驚きの叫びが聞こえた。そして二人同時に、俺が作った穴から入ってきた。

「これは……………」

ルグーグが驚きの声を上げる。なんと雪に隠れて見えなかったが、ここにはなんと洞窟があったのだ。しかし俺の後ろに続く道は暗くて、中の様子はよく見えない。もっとも、苦痛で頭が一杯一杯の俺にとつて、そんなことは現在、かなりどうでもいいことである。

「ちょ、ちよつと。大丈夫？」

フィオナは俺の苦しむ様子を見て、訊ねてきた。俺は痛みに涙を滝のように流しながら叫ぶ。

「これが大丈夫で済むか！」

彼女はジト目で俺を見る。

「だってああでもない、アンタ死んでたわよ」

そう言って彼女は穴の外を指さす。そこには俺と抱きしめあった幼女の姿はなく、代わりに粉々になった雪の破片が沢山あった。

「ダンナは寒さと疲れから幻覚を見てたんだと思ひやす」

なだめるような声でルグーグは言った。違う、コイツらは俺の気持ち分かっちゃいない。俺は涙声で叫んだ。

「現実じゃないって、そんなの分かってたよ！ でもさ！ 可愛い幼女が俺を誘惑してきたんだぞ！ 仕方ないじゃないか！ 夢の中でくらい、いい思いしたっていいじゃないか！」

二人はしばらく、何も言わなかった。

沈黙を打ち破り、フィオナは哀れみの表情で淡々と言った。

「モテないって、辛いわね」

その一言で、俺は完全に打ちのめされた。号泣した。二人の目線が、とても痛かった。

不意に、洞窟の奥で炎が灯った。

「・・・・・・・・誰？」

ささやくように、その声の主は言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8179x/>

魔王を拾ったわけだけど

2011年11月4日15時08分発行